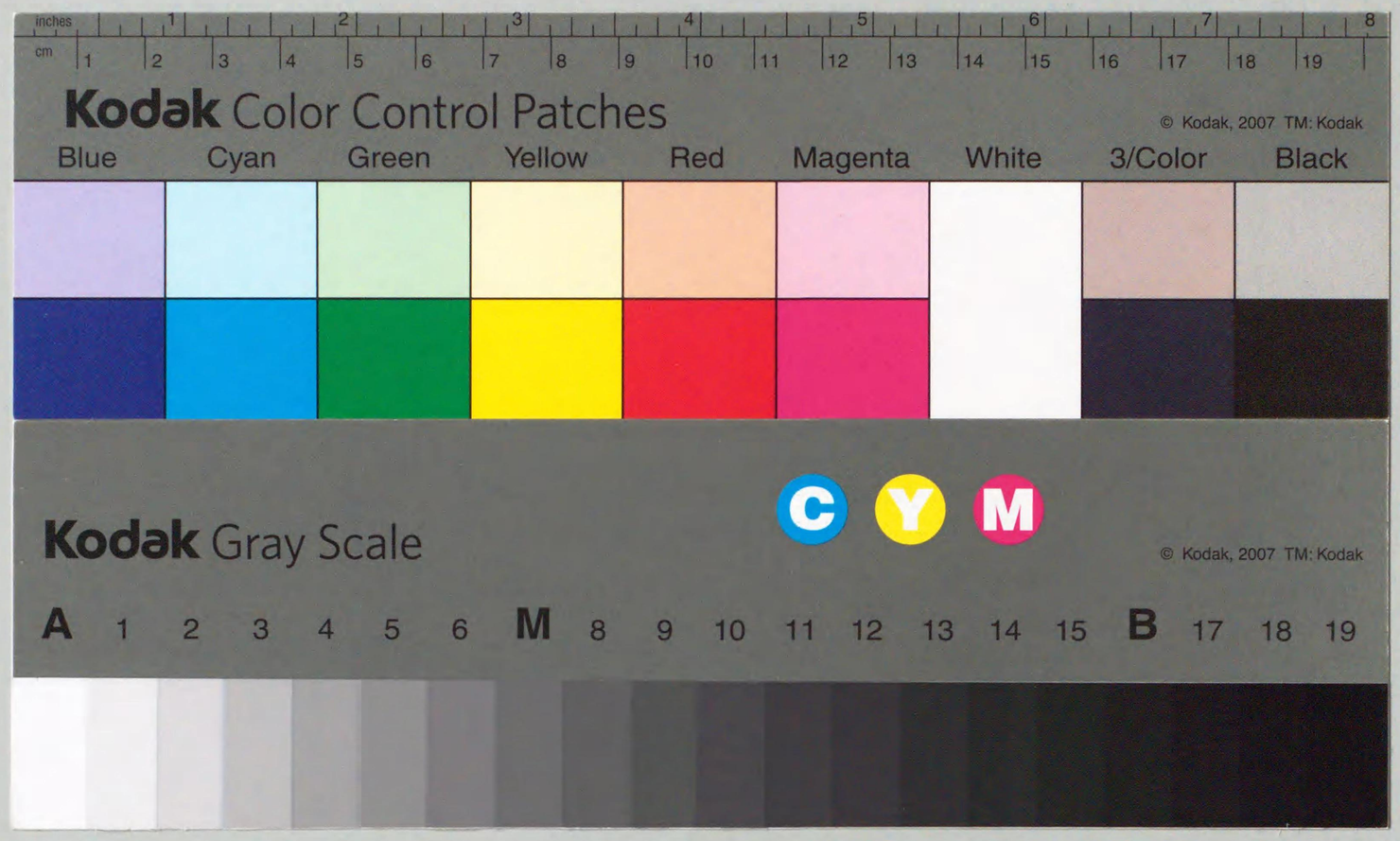

210.6
N688o
00228080

大隈重信関係文書第一

大隈重信関係文書 第一

210.6
N688o

228080

緒言

烏兎匆々、先考薨去せられてより正に十年を經たり、其の間先考傳記の出版せられしもの少からず、就中大隈侯八十五年史、最も浩瀚にして善く先考一代の業績を詳敍せり、但だ惜むらくは根本史料の挿入を闕き、深く史實を究めんと欲する者をして動もすれば望洋の歎を發せしむることなきを保せず、臨時帝室編修官渡邊幾治郎君此に見る所あり、予に勸むるに先考關係文書の公刊を以てす、維新史料編纂官薄井福治君も亦日本史籍協會の意を含み來りて之を上梓せんことを切望せらる、是に於て予欣

然として兩君の言を納れ、文書の選擇編纂を渡邊君に、其の整理校訂を薄井君に托す、既にして本書漸く成るを見る、兩君微りせば豈此の闡發の業を蚤やかにすることを得んや、本書若し明治大正の正史を修むる諸士の爲めに、貢獻裨益するところあらば、獨り予の怡悅たるのみならず、先考の靈亦必らず地下に於て莞爾たるものあらん

昭和七年十月

侯爵　大隈信常

例言

一大隈重信侯は天保九年二月十六日肥前佐賀城下に生れ、大正十一年一月十日八十五歳を以て東京早稲田の邸に薨ぜられたり。侯が初めて明治政府に出仕し維新の宏謨に參畫せしは、實に壯齡三十一歳の時に當り、其の後五十餘年間、朝に在ると野に在るとを問はず、政治家且つ社會改善家として、わが國運發展のために、絶えず活動を續けられたるは、衆人の知悉するところ、今更めて縷々するを要せず、本會は曩きに大久保利通日記二冊、大久保利通文書十冊、岩倉具視關係文書六冊、木戸

孝允文書八册を刊行せしが、茲に又大隈重信關係文書を上梓するを得たるは、會員諸彦と共に洵に喜悅に堪へざるところなり。

一本書は大隈侯爵家所藏の大隈重信關係文書に就き、臨時帝室編修官渡邊幾治郎氏が、史料として價値あるものを選擇し、之に傍註、備考、參考文書等を添付し、年代順に配列編纂せるものなり。

一大隈重信侯は生涯筆を手にせざりしを以て有名なり、故に侯より發したる書翰殆ど無く、又草案を留むるものも極めて稀なり、卽ち本文書の如きも、侯への來翰ありて其の答翰を闕くを常とし、兎角隔靴搔痒の感あるを免れず、是に於て編者は所々に參考史料を挿入し、之に由りて事件の前後顚末を明瞭ならしめ、其の闕點を補ふに努めたり。

一侯の晩年には演說文章等多く發表されたるも、初年、中年には此の類極めて尠なきを以て、編者は侯爵家及び官府所藏の文書等に就き、意見書、建白書の類にして歷史的價値あるものは之を收載することゝなせり。

一侯の公生涯は三期に大別し得べし、第一期は明治元年より同十四年の退官に至る、侯が外交、民政、財政の各方面に亘り、明治維新の完成、新日本の建設に邁進したる時代なり、第二期は明治十五年より同三十一年に至る、

侯の政黨時代にして立憲政治の樹立と、其の完成とを目的として奮鬪したる時代なり、第三期は明治三十二年より大正十一年の薨去に至る、侯が多年の逆境を出でゝ所謂大正維新の機運に乘じ、第二次大隈内閣を組織して世界大戰に乘出し、日支外交の解決に努力した る時代なり、本文書は卽ち上記各期の文書を蒐集し、之に由りて明治、大正の正史を編む者のために正確なる史料を提供すると同時に、大隈侯一代の公生活を觀んとするに在り、而して本文書の印刷に際しては、成るべく原本の態を存することに努め、平假名、片假名の混用も之を改めず、變體假名の如きも亦之を用ゐることゝなせり。

一終に菰み、本會は本文書の公刊を快諾せられたる大隈侯爵、並びに其編纂に從事せられたる渡邊幾治郎氏に對し、深厚の謝意を表するものなり。

昭和七年十月

日本史籍協會

大隈重信關係文書第一

自明治元年
至同五年

目次

明治元年

一　澤宣嘉書翰「德大寺實則宛」明治元年四月十八日　一頁
二　伊達宗城書翰「東久世通禧等宛」明治元年閏四月十三日　二
三　西園寺雪江等書翰「小松清廉等宛」明治元年閏四月二十四日　五
四　小松清廉書翰「大隈重信宛」明治元年十月二十七日　六
五　大隈重信書翰「英國領事マルクス・フロウル宛」明治元年十一月二十三日　八
六　井上馨書翰「大隈重信宛」明治元年十二月六日　九
七　辨事書翰「大隈重信宛」明治元年十二月二十六日　一一
八　片山傳七書翰「大隈重信宛」明治元年十二月二十六日　一一

明治二年

九　伊藤博文書翰　「大隈重信宛」　明治二年正月五日　一三
一〇　五代友厚書翰　「大隈重信宛」　明治二年正月七日　一四
一一　外國官判事書翰　「辨事宛」　明治二年正月十七日　一六
【別紙】　ハルリー・バークス書翰　「東久世通禧宛」　明治二年正月　一六
【參考】　ハルリー・バークス書翰　「東久世通禧宛」　明治二年正月二十二日　一八
【參考】　フォン・ブラント書翰　「東久世通禧宛」　明治二年正月十二日　一九
一二　阿野公誠書翰　「大隈重信等宛」　明治二年正月二十七日　二一
一三　小松清廉書翰　「大隈重信宛」　明治二年正月三十日　二二
一四　後藤象二郎書翰　「大隈重信宛」　明治二年二月朔日　二四
一五　伊達宗城書翰　「大隈重信宛」　明治二年二月二日　二五
一六　五代友厚書翰　「大隈重信宛」　明治二年二月三日　二六

一七　東久世通禧書翰　「大隈重信宛」　明治二年二月七日　二七
一八　中御門經之書翰　「大久保利通宛」　明治二年二月八日　二七
一九　由利公正書翰　「大隈重信宛」　明治二年二月十日　二八
二〇　中御門經之書翰　「大隈重信宛」　明治二年二月十日　二九
二一　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治二年二月二十三日　三〇
二二　岩倉具視書翰　「大隈重信宛」　明治二年二月二十三日　三〇
二三　ロベルトソン書翰　明治二年二月二十四日　三一
二四　ウヲルス等書翰　「外國官宛」　明治二年二月二十四日　三五
二五　外國官判事書翰　「大隈重信宛」　明治二年二月二十六日　三七
二六　外國官判事通牒　「會計官判事宛」　明治二年三月　三九
【別紙】　外國官及會計官判事書翰　「行政官辨事宛」　明治二年三月　三九
二七　町田久成書翰　「都築莊藏宛」　明治二年三月六日　四一
【參考】　木戸孝允書翰　「中井弘藏宛」　明治二年三月八日　四一

二八　英商オールト書翰「大隈重信宛」明治二年三月九日　四六
二九　寺嶋宗則書翰「町田久成宛」明治二年三月十一日　四七
三〇　五代友厚書翰「大隈重信等宛」明治二年三月二十三日　四九
三一　東久世通禧書翰「町田久成等宛」明治二年三月二十五日　五一
三二　中井弘書翰「大隈重信宛」明治二年三月二十五日　五四
三三　東久世通禧書翰「大隈重信宛」明治二年三月二十八日　五五
三四　英國公使パークス書翰「伊達宗城等宛」明治二年三月二十八日　五六
三五　會計官通牒「辨事宛」明治二年三月　五七
三六　山口尙芳書翰「大隈重信宛」明治二年四月朔日　五八
三七　英國公使パークス書翰「大隈重信等宛」明治二年四月七日　五九
三八　楠田英世書翰「大隈重信宛」明治二年四月九日　六〇
三九　伊達宗城書翰「大隈重信宛」明治二年四月十一日　六五
四〇　山口尙芳書翰「大隈重信宛」明治二年四月十一日　六六
四一　井上馨書翰「大隈重信宛」明治二年四月十一日　六七
四二　中井弘書翰「伊達宗城宛」明治二年四月十二日　六八
四三　伊達宗城書翰「大隈重信宛」明治二年四月十四日　六九
四四　野村盛秀書翰「大隈重信等宛」明治二年四月十六日　六九
四五　大村益次郎書翰「大隈重信宛」明治二年四月二十二日　七一
四六　英商オールト書翰「大隈重信宛」明治二年四月二十二日　七一
四七　中井弘書翰「大隈重信宛」明治二年四月二十五日　七二
四八　馬渡俊邁等書翰「大隈重信等宛」明治二年四月二十五日　七三
四九　寺嶋宗則書翰「大隈重信等宛」明治二年四月二十五日　七四
五〇　岩倉具視書翰「大隈重信宛」明治二年四月二十八日　七五
五一　辨事書翰「大隈重信宛」明治二年四月二十八日　七六
【參考】大久保利通書翰「岩倉具視宛」明治二年四月二十八日　七六
五二　田中廉太郎書翰「大隈重信宛」明治二年五月一日　七八

五三　會計官書記書翰　「大隈重信宛」　明治二年五月九日　八〇
五四　辨事書翰　「大隈重信宛」　明治二年五月十三日　八〇
五五　楠田英世書翰　「大隈重信等宛」　明治二年五月十五日　八一
五六　外國官判事書翰　「大隈重信宛」　明治二年五月十七日　八四
五七　田中廉太郎書翰　「大隈重信宛」　明治二年五月二十一日　八四
【參考】大久保利通覺書　「岩倉具視宛」　明治二年五月　八五
五八　大村益次郎書翰　「大隈重信宛」　明治二年六月七日　八七
五九　大村益次郎書翰　「大隈重信宛」　明治二年六月七日　八八
六〇　中井弘書翰　「町田久成等宛」　明治二年六月十一日　八八
六一　辨事書翰　「萬里小路博房宛」　明治二年六月十二日　九一
六二　井上馨書翰　「大隈重信宛」　明治二年六月二十一日　九二
六三　楠田英世書翰　「大隈重信等宛」　明治二年七月五日　九三
六四　井上馨書翰　「大隈重信等宛」　明治二年七月七日　九六

六五　井上馨等書翰　「大隈重信等宛」　明治二年七月七日　九八
六六　井上馨等書翰　「大隈重信等宛」　明治二年七月七日　九九
六七　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治二年七月九日　一〇一
【參考】大久保利通書翰　「岩倉具視宛」　明治二年七月十日　一〇二
六八　井上馨等書翰　「大隈重信等宛」　明治二年七月十一日　一〇三
六九　三條實美等書翰　「大隈重信等宛」　明治二年七月十六日　一〇八
七〇　廣澤眞臣書翰　「大隈重信宛」　明治二年七月十七日　一一〇
七一　澤宣嘉書翰　「大隈重信宛」　明治二年七月十八日　一一一
七二　寺嶋宗則書翰　「伊藤博文宛」　明治二年七月十八日　一一二
七三　井上馨等書翰　「大隈重信等宛」　明治二年七月二十日　一一二
【參考】木戸孝允書翰　「伊藤博文宛」　明治二年七月二十五日　一一五
七四　山口尙芳等書翰　「大隈重信等宛」　明治二年七月二十五日　一一八
七五　木戸孝允書翰　「大隈重信宛」　明治二年七月二十九日　一二〇

七六　木戸孝允書翰　「大隈重信宛」　明治二年八月朔日　一二一
【參考】木戸孝允書翰　「伊藤博文宛」　明治二年八月朔日　一二二
七七　寺島宗則書翰　「大隈重信宛」　明治二年八月二日　一二三
七八　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治二年八月三日　一二四
七九　三條實美等書翰　「大隈重信宛」　明治二年八月五日　一二四
八〇　中井弘書翰　「大隈重信宛」　明治二年八月六日　一二六
八一　四條隆平書翰　「大隈重信宛」　明治二年八月十三日　一二九
八二　北代正臣書翰　「大隈重信等宛」　明治二年八月十六日　一三〇
八三　伊藤博文書翰　「大隈重信宛」　明治二年八月二十日　一三七
八四　木戸孝允書翰　「大隈重信宛」　明治二年八月二十五日　一三八
八五　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治二年八月二十六日　一四一
八六　廣澤眞臣書翰　「大隈重信宛」　明治二年八月二十七日　一四二
八七　刑部省通牒　「民部省宛」　明治二年八月二十七日　一四三

八八　伊藤博文書翰　「大隈重信宛」　明治二年九月三日　一四三
八九　伊藤博文書翰　「大隈重信宛」　明治二年九月七日　一四六
九〇　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治二年九月七日　一四八
九一　野村盛秀書翰　「大隈重信等宛」　明治二年九月七日　一四九
九二　北代正臣書翰　「大隈重信等宛」　明治二年九月十三日　一五一
九三　吉井友實書翰　「大隈重信宛」　明治二年九月十七日　一五五
九四　廣澤眞臣書翰　「大隈重信宛」　明治二年九月十八日　一五六
九五　伊藤博文書翰　「大隈重信宛」　明治二年九月二十日　一五八
九六　彈正臺通牒　「大隈重信宛」　明治二年九月二十三日　一五九
九七　上野景範書翰　「大隈重信宛」　明治二年九月二十三日　一六〇
九八　上野景範書翰　「大隈重信宛」　明治二年九月二十六日　一六一
九九　外務省通牒　「大隈重信宛」　明治二年十月七日　一六三
一〇〇　中井弘書翰　「大隈重信宛」　明治二年十月十四日　一六三

一〇一　五代友厚書翰　「大隈重信宛」　明治二年十月二十日　一六五
一〇二　井上馨書翰　「大隈重信等宛」　明治二年十月二十日　一六七
一〇三　加納夏雄等書翰　「大隈重信等宛」　明治二年十月二十九日　一七〇
一〇四　外務省通牒　「大隈重信等宛」　明治二年十一月四日　一七一
【別紙】伊達宗城書翰　「外務省宛」　明治二年十一月四日　一七二
一〇五　伊藤博文書翰　「大隈重信宛」　明治二年十一月十四日　一七三
一〇六　米國公使デロング書翰　「澤宣嘉等宛」　明治二年十一月十八日　一七三
一〇七　寺島宗則書翰　「大隈重信宛」　明治二年十二月三日　一七八
一〇八　伊藤博文書翰　「大隈重信宛」　明治二年十二月九日　一七九
一〇九　槇村正直等書翰　「大隈重信等宛」　明治二年十二月十一日　一八一
一一〇　野村盛秀書翰　「大隈重信等宛」　明治二年十二月十二日　一八四
一一一　井田讓書翰　「大隈重信宛」　明治二年十二月二十一日　一八六
一一二　井上馨書翰　「大隈重信宛」　明治二年十二月二十九日　一八八
一一三　武富文之助書翰　「大隈重信宛」　明治二年　一八九

明治三年

一一四　木戸孝允書翰　「大隈重信宛」　明治三年正月十三日　一九七
一一五　伊藤博文書翰　「大隈重信宛」　明治三年正月二十一日　一九八
一一六　英公使館員シーボルト書翰　「外務大少丞宛」　明治三年正月二十六日　二〇〇
一一七　野村盛秀書翰　「大隈重信等宛」　明治三年正月二十七日　二〇一
一一八　英公使館員シーボルト書翰　「大隈重信宛」　明治三年二月四日　二〇二
一一九　野村盛秀書翰　「大隈重信等宛」　明治三年二月六日　二〇三
一二〇　關義臣書翰　「大隈重信宛」　明治三年二月十五日　二〇四
一二一　木戸孝允書翰　「大隈重信宛」　明治三年二月十五日　二〇七
一二二　鄕純造書翰　「大隈重信等宛」　明治三年二月十九日　二〇八
一二三　伊藤博文書翰　「大隈重信等宛」　明治三年二月二十一日　二一二

一二四　米國公使デロング書翰　「澤宣嘉等宛」　明治三年三月十二日　二一五
一二五　大久保利通書翰　「大隈重信等宛」　明治三年三月二十三日　二一九
一二六　大河内輝聲書翰　「大隈重信宛」　明治三年三月二十四日　二一九
【別紙】大河内輝聲陳情書　「太政官宛」　明治三年三月廿四日　二二二
一二七　岩倉具視書翰　「大隈重信宛」　明治三年四月四日　二二五
一二八　渡邊清報告書　「民部省大少丞宛」　明治三年四月九日　二二五
一二九　鷲尾隆聚書翰　「大隈重信宛」　明治三年四月十五日　二二七
一三〇　島義勇願書　「民部省宛」　明治三年四月　二三〇
一三一　渡邊清書翰　「大隈重信宛」　明治三年五月四日　二三一
一三二　岩倉具視書翰　「大隈重信宛」　明治三年五月十二日　二三二
一三三　坂部晋三郎書翰　「大隈重信宛」　明治三年五月十七日　二三三
一三四　外務省通牒　「大隈重信宛」　明治三年五月十七日　二三五
一三五　廣澤眞臣書翰　「大隈重信等宛」　明治三年五月二十二日　二三六
一三六　伊藤博文書翰　「大隈重信宛」　明治三年五月二十三日　二三七
一三七　伊藤博文書翰　「大隈重信宛」　明治三年五月二十五日　二三九
一三八　伊藤博文書翰　「大隈重信宛」　明治三年五月二十七日　二四二
一三九　渡邊徹書翰　「大隈重信等宛」　明治三年六月三日　二四三
一四〇　東洋銀行支配人ロベルトソン書翰　「大隈重信宛」　明治三年六月七日　二四六
一四一　山中獻書翰　「大隈重信宛」　明治三年六月七日　二四九
一四二　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治三年六月十一日　二五二
一四三　北代正臣書翰　「大隈重信宛」　明治三年六月十三日　二五三
【參考】三條實美書翰　「佐々木高行宛」　明治三年六月十三日　二五六
【參考】木戸孝允書翰　「伊藤博文宛」　明治三年六月七日　二五九
【參考】大久保利通書翰　「岩倉具視宛」　明治三年六月二十一日　二六一
【參考】廣澤眞臣書翰　「大久保利通等宛」　明治三年六月二十三日　二六三
一四四　廣澤眞臣書翰　「大隈重信等宛」　明治三年六月十五日　二六五

一四五　大木喬任書翰「大隈重信等宛」明治三年六月十六日　二六六
一四六　加藤弘之書翰「大隈重信宛」明治三年六月十九日　二六七
一四七　三條家執事書翰「大隈重信宛」明治三年六月二十日　二六八
一四八　佐野常民書翰「大隈重信宛」明治三年六月二十日　二六八
一四九　寺島宗則書翰「大隈重信等宛」明治三年六月二十一日　二七〇
一五〇　北代正臣書翰「大隈重信等宛」明治三年六月二十四日　二七一
一五一　伊藤博文書翰「大隈重信宛」明治三年六月二十五日　二七四
一五二　伊藤博文書翰「大隈重信宛」明治三年六月二十七日　二七七
【參考】木戸孝允書翰「伊藤博文宛」明治三年七月二日　二七八
一五三　三條實美書翰「大隈重信宛」明治三年七月三日　二八三
【參考】木戸孝允書翰「大久保利通宛」明治三年七月四日　二八五
【參考】大久保利通書翰「木戸孝允宛」明治三年七月五日　二八七
一五四　英國公使パークス書翰「大隈重信等宛」明治三年七月三日　二八九
一五五　岡本忠利書翰「大隈重信宛」明治三年七月四日　二九〇
一五六　伊藤博文書翰「大隈重信宛」明治三年七月六日　二九二
【參考】原保太郎書翰「岩倉具視等宛」明治三年七月十三日　二九六
【參考】大橋愼建言書「岩倉具視宛」明治三年七月十四日　二九八
【別紙】大橋愼書翰「岩倉具視宛」明治三年七月十四日　二九九
一五七　伊藤博文書翰「大隈重信宛」明治三年七月十四日　三〇〇
一五八　大木喬任等書翰「大隈重信宛」明治三年七月二十三日　三〇二
一五九　岩倉具視書翰「大隈重信宛」明治三年八月十二日　三〇三
【參考】木戸孝允書翰「伊藤博文宛」明治三年八月十七日　三〇三
一六〇　加藤弘之書翰「大隈重信宛」明治三年八月二十四日　三〇六
一六一　加藤弘之書翰「大隈重信宛」明治三年八月二十五日　三〇七
一六二　井上馨書翰「大隈重信宛」明治三年八月二十八日　三〇七
一六三　渡邊清書翰「大隈重信宛」明治三年九月二日　三〇九

一六四　英國技師モレル書翰「大木喬任等宛」明治三年九月十六日　三一〇
一六五　伊藤博文書翰「大隈重信宛」明治三年九月二十五日　三一二
一六六　上野景範書翰「大隈重信等宛」明治三年九月二十五日　三一三
一六七　澁澤榮一書翰「大隈重信宛」明治三年九月二十七日　三一六
【別紙】大久保忠寛書翰　明治三年九月　三一七
一六八　上野景範書翰「大隈重信等宛」明治三年九月二十七日　三一七
一六九　門屋幸之助等願書「大藏省宛」明治三年九月　三二一
【別紙】門屋幸之助等見積書　明治三年九月　三二二
一七〇　馬渡俊邁書翰「大隈重信宛」明治三年十月七日　三三〇
一七一　岩倉具視書翰「大隈重信宛」明治三年十月十一日　三三一
一七二　渡邊昇書翰「大隈重信宛」明治三年十月十一日　三三二
一七三　三條實美書翰「大隈重信宛」明治三年十月十二日　三三三
一七四　岩倉具視書翰「大隈重信宛」明治三年閏十月八日　三三四
一七五　岩倉具視書翰「大隈重信宛」明治三年閏十月十日　三三五
一七六　馬渡俊邁書翰「大隈重信宛」明治三年閏十月二十五日　三三六
一七七　廣澤眞臣書翰「大隈重信宛」明治三年十一月八日　三三八
一七八　肥田濱五郎意見書　明治三年十一月　三三九
一七九　黑田淸隆書翰「大隈重信等宛」明治三年十二月三日　三四一
一八〇　木戸孝允書翰「大隈重信宛」明治三年十二月五日　三四三
一八一　大橋愼書翰「大隈重信宛」明治三年十二月七日　三四四
一八二　三條實美書翰「大隈重信宛」明治三年十二月十八日　三四六
一八三　井上馨書翰「大隈重信宛」明治三年十二月二十四日　三四七
一八四　土方久元書翰「大隈重信宛」明治三年十二月二十六日　三四八

明治四年

一八五　井上馨等書翰「伊藤博文宛」明治四年正月二日　三四九

一八六　井上馨書翰　「大隈重信宛」　明治四年正月十日　三五六
一八七　橋本實梁書翰　「大隈重信宛」　明治四年正月十一日　三五七
一八八　英公使館員サトウ書翰　「大隈重信宛」　明治四年正月二十一日　三五八
一八九　深瀬仲麿書翰　「大隈重信宛」　明治四年正月廿二日　三五九
一九〇　辨官通牒　「大隈重信宛」　明治四年二月五日　三六〇
一九一　獨逸公使ブラント書翰　「澤宣嘉宛」　明治四年二月九日　三六一
一九二　土山盛有書翰　「大隈重信宛」　明治四年二月二十二日　三六三
一九三　中井弘書翰　「大隈重信宛」　明治四年二月二十六日　三六七
一九四　中井弘書翰　「大隈重信宛」　明治四年二月二十九日　三六九
一九五　馬渡俊邁書翰　「大隈重信宛」　明治四年三月六日　三六九
一九六　岩倉具視書翰　「大隈重信宛」　明治四年三月二十七日　三七〇
一九七　工部省諸掛建議書　「大隈重信宛」　明治四年三月二十七日　三七一
一九八　井關盛艮書翰　「大隈重信等宛」　明治四年四月十一日　三七三
一九九　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治四年五月十五日　三七五
二〇〇　澤宣嘉書翰　「三條實美義等宛」　明治四年六月九日　三七六
二〇一　宮川房之書翰　「大隈重信宛」　明治四年六月二十日　三七七
二〇二　馬渡俊邁書翰　「大隈重信宛」　明治四年六月二十日　三七九
二〇三　馬渡俊邁書翰　「大隈重信宛」　明治四年六月二十三日　三八二
二〇四　木戸孝允書翰　「大隈重信宛」　明治四年六月二十七日　三八五
二〇五　大久保利通書翰　「大隈重信宛」　明治四年七月十一日　三八六
【參考】伊藤博文書翰　「井上馨宛」　明治四年七月十四日　三八七
二〇六　伊藤達宗城書翰　「三職宛」　明治四年八月朔日　三九〇
二〇七　田村昌宗書翰　「大隈重信宛」　明治四年八月朔日　三九一
二〇八　田村昌宗書翰　「大隈重信宛」　明治四年八月朔日　三九三
二〇九　高橋新吉書翰　「大隈重信宛」　明治四年八月五日　三九五
二一〇　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治四年八月十八日　三九八

二一一　大久保利通書翰　「大隈重信宛」　明治四年八月十九日　三九九
二一二　馬渡俊邁書翰　「大隈重信宛」　明治四年八月二十五日　四〇〇
二一三　佐々木高行書翰　「大隈重信宛」　明治四年八月二十九日　四〇一
二一四　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治四年九月十六日　四〇一
二一五　陸奥宗光書翰　「大隈重信宛」　明治四年九月十七日　四〇二
二一六　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治四年九月二十三日　四〇三
二一七　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治四年九月二十五日　四〇四
二一八　陸奥宗光書翰　「大隈重信宛」　明治四年十月四日　四〇四
二一九　木戸孝允書翰　「大隈重信宛」　明治四年十月九日　四〇五
【參考】諸官員盟約書　明治四年十一月　四〇八
二二〇　井上馨書翰　「大隈重信宛」　明治四年十月十日　四一三
二二一　木戸孝允書翰　「大隈重信宛」　明治四年十月十二日　四一四
二二二　木戸孝允書翰　「大隈重信宛」　明治四年十月十四日　四一六
二二三　黑田清隆書翰　「大隈重信宛」　明治四年十月十四日　四一七
二二四　伊藤博文書翰　「大隈重信宛」　明治四年十月十九日　四一八
二二五　五代友厚書翰　「大隈重信宛」　明治四年十月中旬　四一八
二二六　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治四年十月二十三日　四二一
二二七　井上馨書翰　「大隈重信宛」　明治四年十月二十三日　四二二
二二八　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治四年十月二十五日　四二三
二二九　岩倉具視書翰　「大隈重信宛」　明治四年十一月朔日　四二三
二三〇　岩倉具視書翰　「大隈重信宛」　明治四年十一月四日　四二四
二三一　秋月種樹書翰　「大隈重信宛」　明治四年十二月十七日　四二五
二三二　松村俊平書翰　「大隈重信宛」　明治四年十二月十八日　四二七
二三三　伊藤博文書翰　「大隈重信宛」　明治四年十二月二十一日　四二八

明治五年

二三四　伊東武重書翰　「大隈重信宛」　明治五年正月四日　四三一
二三五　田中光儀書翰　「大隈重信宛」　明治五年正月七日　四三六
二三六　五代友厚書翰　「大隈重信宛」　明治五年正月十日　四三九
二三七　平松時厚書翰　「大隈重信宛」　明治五年正月十六日　四四二
二三八　大木喬任書翰　「大隈重信宛」　明治五年正月二十七日　四四五
二三九　澁澤榮一書翰　「大隈重信宛」　明治五年二月十日　四四六
二四〇　細川潤次郎書翰　「大隈重信宛」　明治五年二月十三日　四四七
二四一　關義臣書翰　「大隈重信宛」　明治五年二月二十五日　四四八
二四二　大江卓書翰　「大隈重信宛」　明治五年二月二十八日　四五三
二四三　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治五年二月二十九日　四五四
二四四　大谷光瑩書翰　「大隈重信宛」　明治五年三月六日　四五五
二四五　岩倉具視書翰　「大隈重信宛」　明治五年三月朔日　四五六
二四六　福羽美靜書翰　「大隈重信宛」　明治五年三月七日　四五七

二四七　伊藤博文書翰　「大隈重信宛」　明治五年四月四日　四五八
二四八　松田道之書翰　「大隈重信宛」　明治五年四月九日　四六〇
二四九　陸奥宗光書翰　「大隈重信宛」　明治五年五月朔日　四六一
二五〇　伊藤博文書翰　「大隈重信宛」　明治五年五月二日　四六二
二五一　陸奥宗光書翰　「大隈重信宛」　明治五年五月十三日　四六四
二五二　井上馨書翰　「大隈重信宛」　明治五年五月二十二日　四六五
二五三　島惟精書翰　「大隈重信宛」　明治五年五月二十三日　四六六
二五四　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治五年五月二十四日　四六八
二五五　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治五年五月二十九日　四六九
二五六　副島種臣書翰　「正院宛」　明治五年五月二十九日　四七〇
二五七　セーウエルソン上申書　明治五年六月四日　四七一
二五八　伊東武重書翰　「大隈重信宛」　明治五年六月十三日　四七四
二五九　伊東武重報告書　「庶務課等宛」　明治五年六月十三日　四七八

二六〇　伊藤博文書翰　「大隈重信宛」　明治五年六月十九日　四八一
二六一　楠本正隆書翰　「大隈重信宛」　明治五年六月二十日　四八三
二六二　五代友厚書翰　「大隈重信宛」　明治五年六月二十一日　四八五
二六三　寺嶋宗則書翰　「副島種臣宛」　明治五年六月二十一日　四八七
二六四　勝安芳書翰　「大隈重信宛」　明治五年六月二十七日　四八八
二六五　寺嶋宗則書翰　「副島種臣宛」　明治五年七月十日　四九〇
二六六　熾仁親王書翰　「大隈重信宛」　明治五年七月十日　四九四
二六七　副島種臣書翰　「大隈重信宛」　明治五年七月十日　四九五
二六八　寺嶋宗則書翰　「大隈重信宛」　明治五年七月十二日　四九六
二六九　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治五年七月十四日　四九七
二七〇　高橋新吉書翰　「大隈重信宛」　明治五年七月十七日　四九八
二七一　山縣有朋書翰　「大隈重信宛」　明治五年八月二日　四九九
二七二　江藤新平書翰　「大隈重信宛」　明治五年八月十二日　五〇〇

二七三　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治五年八月十四日　五〇一
二七四　三條實美書翰　「大隈重信宛」　昵治五年八月十七日　五〇二
二七五　四條隆平書翰　「大隈重信宛」　明治五年八月二十九日　五〇二
二七六　木戸孝允書翰　「參議一同宛」　明治五年八月　五〇三
二七七　寺島宗則書翰　「副島種臣宛」　明治五年九月二日　五一〇
二七八　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治五年九月十三日　五一四
二七九　澁澤榮一書翰　「大隈重信宛」　明治五年九月二十五日　五一六
二八〇　西岡逾明書翰　「大隈重信宛」　明治五年十月二日　五一七
二八一　井上馨書翰　「大隈重信宛」　明治五年十月三日　五二一
二八二　澁澤榮一書翰　「大隈重信宛」　明治五年十月八日　五二三
二八三　大木喬任書翰　「大隈重信宛」　明治五年十月十日　五二三
二八四　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治五年十月十五日　五二四
二八五　三條實美書翰　「大隈重信宛」　明治五年十月二十二日　五二五

二八六　井上馨書翰「大隈重信宛」明治五年十月二十三日　五二六
二八七　島惟精書翰「大隈重信宛」明治五年十月二十五日　五二八
二八八　杉浦讓書翰「大隈重信宛」明治五年十月二十八日　五二九
二八九　三條實美書翰「大隈重信宛」明治五年十一月十日　五三〇
二九〇　澁澤榮一書翰「大隈重信宛」明治五年十二月二日　五三一
二九一　子安宗峻等書翰「大隈重信宛」明治五年十二月十六日　五三三
二九二　寺嶋宗則書翰「大隈重信宛」明治五年十二月二十三日　五三六
二九三　三條實美書翰「大隈重信宛」明治五年　五三七
二九四　大江卓書翰「大隈重信宛」明治五年　五三八

目次終り

東京大學圖書館藏書

大隈重信關係文書　第一

自明治元年
至明治五年

明治元年

一　澤宣嘉書翰「德大寺實則宛」明治元年四月十八日

主上益御機嫌克御滯坂被爲在候由恐悦至極ニ奉存候次ニ尊君彌御壯健御盡力珍重存候抑今般差向候事件ニ付大隈八太郎上京爲致件々及言上候猶宜御指揮希入存候陳者今度西洋各國ゟ勅使被差立候ニ付町田民部(久成)井上聞多等隨行之命ニ付早々可上坂旨東久世、宇和島(伊達宗城)等ゟ被申越令承知候然處聞太義者過日上京爲仕候事故直樣被　仰付候ゟも不苦候得共民部義ハ何分卽今當所無人之節柄故松方助左衞門(正義)歸崎之上早々上坂爲致候積りニ申答置候右ニ付過日聞多上京之節申上候通外國事務も多端有之且右兩人差出候ゟ者益以當所無人ニ相成候間大隈八太郎御引上之義者何卒御免被　仰

付候樣幾重ニも相願度存候甚以隨意之義申入候樣ニゟ恐入候得共必竟者
皇國之御爲筋与一途ニ存込候迄ニゟ打明ケ再應相願候不惡御聞取願入候
今度八太郎ゟも縷々情實可申上候得共先浦上邨邪教一件申上候ゟ八太郎
義ハ寸刻も早く歸崎致候樣申付置候條何分之義宜御亮察願上候仍早々如
此候也謹言

四月十八日　　（長崎裁判所總督）宣　嘉

德大寺大納言殿

【備考】是年五月四日大隈重信長崎府判事兼外國官判事を命ぜらる

二　伊達宗城書翰「東久世通禧等宛」明治元年閏四月十三日

拜啓薄暑之候候處
皇上倍御機嫌能被爲涉乍憚奉萬福候然ハ本月三日大坂於東本願寺兩副總
裁山階僕判事數輩パークス及應接候左之事件申立候故尙熟議之末賢兄へ
御委任返答可有之と岩倉ゟ答置其後各衆議之上よふ〳〵昨夕決着仕候故
御都合次第御應接有御坐度彼是談判之情實等不能指毫候故委曲大隈之託
口頭置候意味御領掌之上御應接被下事
○江戸開市期限過居候故及催促候處當時慶喜よハ降伏謝罪之實跡相立水
戸ニ謹慎候得共會奴賊徒いまゝ不平江戸人心未タ全ク鎭定ニ不至當時專
ら其邊處置中ニ付彌安心之場合ニ至候ハヽ早々及報告候故其時開市相成
度
但開市之期限預め不申談候得者不承知故八月朔日頃ゟと御談判被相約
度
一新潟開港前同樣賊兵屯集致居戰地ニも可相成尤不遠鎭撫ニ至候時ハ早
速可及談判夫迄相待候樣
但開港期限之事ハ九月朔日頃と約置申候事
右兩事件御談判希入候

○大阪開港之事舊幕之條約書ニ既此事ハ六ケ月之後（五月十一日頃）を待て可議与在りバークスか出入輸税も取立亦各國船碇泊場モ定候ハヽ拔荷等之患も無之各國ニゐも辨利ニ付如此相成度旨申立候得共當時開港と相成候ゐハ闔國人心モ不伏（服）可相生ニ付先々開市丈ニいゑし置度旨評決故是又御談判可被下

外ニ

一銅錢差留候一條已ニ條約面ニ背ケリ故ニ新規則相立於横濱各國公使へ可及談判旨申立候處當時俊介神戸ゟて相用ひ候規則を假ニ可相用事

一大阪神戸在留地之事

右ハ何月何日よりせ賣可致旨於横濱各國公使へ可談

一切支丹處置ハ事尙爾後之時可談置

右三條八太郎關係可談事

各國公使モ是ハ大阪在留可然段決議相成候處土地見立家作等目算相立候

末不遠小松帶刀出港之時可申出と存候荒々此段申述度　頓首

閏四月十三日　　少將宗城（議定職）

東久世　肥前（鍋島直大）　閣下

三　西園寺雪江等書翰「小松清廉等宛」明治元年閏四月二十四日

兼ゐ御承知之通大坂之儀ニ付開市之御條約相濟輸出入之税皆於神戸致收納夫か送狀上乘相付小廻船を以浪花ゟ差廻候事ニ候處神戸大坂ニ相懸無數之手數引合等取締甚不行屆ニ付輸出税丈大坂運上所ニて收納ゟ仕候ハヽ少ニゐも行屆可申上兼ゐ伊藤俊介（外國事務局判事）申談置候處過日英公使來坂之節双方不便利不取締之道理を以大坂開港いたし度段申立候情實ニ御座候然處大坂開港之儀も人氣ニも相關候哉之御評議も爲有之由御尤ニて御座候得共開市開港之別ハ本船を不相繫而已ニテ一切之所置開港地ゟ相異候儀更

ニ無之只名號ニ異候迄ニ御座候仍之伊藤俊介方ニも掛合ニおよひ候處別帋ニ通申來尤ニ相考へ申候間尚御評議被下度尤自然人氣不折合ニ御專念ニも御座候ハヽ名分ハ今形ニゐ本船碇泊を免し輸出入ニ稅收納を以荷物積卸し萬事開港地同樣ニ御所置御條約相成度左樣無御座候ゐ者神戸ゟ相懸取締現實行屆不申候付此段急ニ御評議ニ上大隈八太郎（外國事務局判事）横濱行迄御返答給度御惣督ゟも遂披露御懸合申上候以上

后四月廿四日

小松帶刀殿
後藤象二郎殿

西園寺雪江（宇和島藩士）
五代才助

四　小松清廉書翰「大隈重信宛」明治元年十月二十七日

御出崎來御疎遠仕候得共先々　御清適奉大賀候陳者過日土州林參歸京相成候處兼ゐ御奉命ニ暗殺人凡相分候哉ニ傳聲仕候迚も相分ニ事も萬々六ケ敷相考居候處偏ニ先生ニ御盡力故と感佩ニ至奉存候右事件者舊幕ニゐも不相分候を此節明亮相分候得者御一新ニ際ニ當り政府ニ御威光も相立御同慶奉賀候殊ニ御互ニ處ニゐも於職掌痛心此事ニ御座候處先生ニ御蔭にゐ僕等も大安心仕候爲天下雀躍仕候弟事も御出立後當官ヲ以外國官副知事兼勤被命再三再四固辭仕候得共段々ニ　御沙汰ヲ蒙リ實ニ不肖も不顧無據御受仕候ゐ此節東下被命明日ゟ出船ニ運ニ御座候是非先生御着坂奉待候含ニ御座候處東京ゟも御催促申來出立ニ處ニ相決申候何卒一日も早目御東下奉待候若松其外降伏等ニ次第追々御承知被下候半爲國御同慶奉存候何も細事ハ御東下ニ上与閣筆仕候此段御尋旁迄呈愚札置候頓首九拜

十月念七三字認

大隈先生閣下

小松生（參與外國官副知事）

尙々寒冷之節隨分御自愛奉禱候明日之出船ニゟ紛雜中大亂毫御高免可被下候頓首再拜

【備考】慶應三年七月福岡藩士金子才吉長崎に於て英人二名を殺す下手人全く知れず政府英公使の壓迫に苦しみ是年五月大隈重信を長崎府判事兼外國官判事と爲し是事を處置せしむ重信長崎に至り偵察調査二ケ月餘にして其の實を得たり本書は此事を語るものなり次の書簡と關聯す

五　大隈重信書翰「英國領事エスクワイル宛」明治元年十一月二十三日

以手紙申入候然者去年七月六日貴國軍艦イカルス船乘組之水夫兩人を暗殺せし本人吟味の爲メ當九月奉命出崎以來穿鑿方百方手を盡し漸く一脈れ手掛りよりを暗殺之本人竟ニ發覺其場に居合せし同國の者共七人茲此地ゟ呼寄せ入牢申付追々遂吟味候一卷の次第ハ過日差進置候口書之通ニゟ右申立之趣も元より信用可致存せらるゝ雖とも我ゟ意に於て猶未之少しを不充分なる所も有之ゆへ右同國七人之者を自此地福岡ゟ召連於彼地關係之者共悉く聢与遂詮議其證據を得候上筑前（黑田長溥）宰相も此節在京中之事故直樣上京事情決落ゟし自夫横濱表ゟ立越え貴國公使ゟも面會委詳可及譚話与存候現下當港出帆之期ニ臨み再ひ出會も難計此段以書中申入置候謹言

明治元年十一月廿三日

外國官判事
大隈八太郎在判

英岡士
マルクス、ブロウル、エスクワイル殿

六　井上馨書翰「大隈重信宛」明治元年十二月六日

別後御多祥御上京と奉遠察仕候弟も同日渡海過日二日歸仕候先御相談通りゟ所置仕候ゟ末家之者餘貫徹仕候ゟ死を抛鎭撫方致可申と御請申出候

に付ゐ早速富江丈ハ鎮靜仕候魚目邊も近日鎮撫ハ必然と奉存候此間餘程
意味含セ置候故末家ハ急速舊復之御沙汰御盡力是祈候若し御相談通り變
し候と再燃ハ勿論弟も心底甚以如何敷候ニ付是非とも御周旋可被下候又
双方積怨を捨候て家來之往來をも初メさせ先形上丈ハ熟知之體に取扱置
申候全體銃（五島藩）之丞知行壹萬貳千石餘に相成り申候實ゐ藏米と相成候ゐて立
行方六ッケ敷事に御座候歸後何も相變り候事も無之候申上置候廉々御盡
力可被下候小作復舊も未タ間を不得候之御地之模樣如何箱館之一擧如何
成行候哉是又懸念ニ不堪何分製鐵場之半方正金之事ハ是非御盡力可被下
候其他夫々御所置奉憑候其内時下兼々御自愛專一奉存候　草々敬白

十二月六日

二白朝陽丸ゐハ甚困窮此事ニ候金之手も不合込り入申候未タ歸崎不
仕候老兄方よも實ゐ御不幸御堪かたく候嘸々御配慮と奉察候以上

八太郎樣　　聞多

七　辨事書翰「大隈重信宛」明治元年十二月二十六日

五島幷耶蘇之事件ニ付輔相（三條實美）卿ゐ御談ニ相成居候義相分リ候ハヽ今日御出
仕可被成未無其儀候ハヽ明日ハ必御出仕可被成候樣御同卿ゐ右之旨可申
進樣御差圖ニ依ゐ申入候也

十二月廿六日　　辨事

大隈八太郎殿

八　片山傳七書翰「大隈重信宛」明治元年十二月二十六日

甚寒之節愈御安泰被成御勤珍重奉存候然者先般御出之節　御直ニ牛料理
方之儀御申上被成候趣ニゐ折角御待兼被遊候間明後廿八日正午ゐ料理人
幷牛肉共御沙汰之通御遣被下候樣被遊　御沙汰に付御用繁之御半是等之
儀申上兼候得共何卒宜御取計被下度此段爲相談如斯御座候以上

十二月廿六日　　片山傳七

大隈八太郎樣

明治二年

九　伊藤博文書翰「大隈重信宛」明治二年正月五日

昨夜井上ヨリ巨細御示談ニ及候趣ニ御座候處僕身上ニ儀過日來種々熟考仕見候處當地滯在仕候儀萬々無覺束固より議論ニ合と不合ニ致方無御座候へ共事實ニ於有益を求候儀今日も至要と奉存候ニ付鄙衷を奉訴候次第ニ御座候間篤と御熟慮被下候樣奉願候いつを拜青萬々可申上候

過日來御不快ニ趣如何被成候哉兩三日も御無沙汰申上奉恐入候昨日參朝金札引換諸藩へ布令書五代氏（友厚、大坂府判事）ニ草案ニ就ゐ木戸と共ニ改正仕差出置申候木戸曰諸藩よて此意味を篤と了解不仕ものハ會計官へ伺出候へハ委敷可申聞段も相達置申度との事ニ付端書ニ書加へ置申候自然會計官罷出候も

の御座候へハ此一事い細承知仕候者より辨説仕り聞を候へハ殊更旨趣柄相解盡力ニも一助を得可申と奉存候此段御含置被下候ゑ役人へ御申聞置可被下候版籍論も少し相運ひ可申模様も有之一盡力ニ機會を得申度頻りニ企望罷在候いつを登堂可奉得拜晤匆々拜白

五日

大隈彦兄　　俊介（兵庫縣知事）

【備考】二月三日金札百二十兩を以て金百圓に抵て府藩縣に申諭し人民の私に價位を立つること勿らしむ

一〇　五代友厚書翰「大隈重信宛」明治二年正月七日

改年ニ御吉慶目出度申收候然者別紙野村ゟニ壹封越藩横井左十郎と申仁持參ハさし候間早々差出申候同人ニ説ニ英艦水夫暗殺一條ハ御出立後本人相知を全筑藩金子才吉ニ所業ニも無之候由又々御手數と可相成定ゑ非行も崎陽ゟ細々申來居候半横井左十郎スパン出入一條も同人歎願申出右ニスパンも當分浪花へ罷在候付いつを公明の裁判相付不申候ゑも不相濟事ニ御座候得共此内ゟニ御取扱振も御座候間御下坂ニ上得与御相談申上度奉存候御地も横井參與（小楠）横死云々相達折角探索中ニ御座候得共當所未手當も無御座候　御一新の今日ニ至り右様の所業ニ及候儀言語同斷第一も御政體上ニ相關申候間草を分是非召捕申度事ニ御座候此儀申上度儀も御座候得共後便と申上縮候匆々敬白

初春七日　　五代才助（大阪府判事）

大隈八太郎様

貳白此内ゟ御咄合仕置候浪華商法會所云々及會計礎基云々ハ是非御論破被下度中井（弘）ニも兩日中ニも出京ニ筈御座候小松（清廉）ニも未滯坂日限も不相分候南貞助ゟニ一封差出申候

【備考】是月五日横井小楠京都寺町通に於て退朝の途暗殺せらる

一一　外國官判事書翰「辨事宛」明治二年正月十七日

別紙ニ通英國獨乙北部聯邦兩公使より申來候間寫二通差進申候此等ニ事件外國人より喋々申立候樣ニ而も只信義汰外國ハ御失ひ被成候而已ならず實ニ皇國の大耻ニ御座候間何卒急速御取締被相立外國人ニ異議汰不生樣御處置有之度此段及御掛合候也

正月十七日　　外國官判事

辨事御中

【別紙】

以書狀致啓上候然も彼我相互ニ商賈相通候處貴國壹分銀と貳分金近頃相場思ニ外下落いたし兩國交易大ニ致顛倒候ニ付難澁ニ趣相聞へ候右も西曆千八百六拾六年六月廿五日取替せし新條約ニ依るニ壹分銀と申貨幣ハ銀九分以上交物壹分以下ニて目方トロイグレイヌス百三拾四箇と決定し候此銀位ニてハ額銀三百拾壹枚メキシコトラル淨銀也壹百枚ニ相當ゟり彼我貨幣引替前文ニ通り相極候上ハ相場相立候筈無之候得共今日ニ至り却而メキシコドラル百枚ニ付額銀三百四拾乃至三百五拾枚ニ下落いたし候其爲ニ舶來品難賣捌相成且貴國ノ貨幣を所持セる外國人多分ニ損失ニ至ゟり右額銀ニ相場過分ニ下落いたし候儀ハ彼我輸出輸入ニ多少或は貴國政府ニ於て掉金銀買入ニ條約ニ爲洋銀相場騰貴セしニハ而らず只千八百六拾年新條約ニて取極めし銀位ハ性合惡き額銀吹出しニ相成且貳分金ニ贋貨幣多ク行わゟ候評說有之候故如前文下落致し候事有之候千八百六拾六年新條約ニて壹分銀ニ性合斷然と相極候上ハ貴國政府ニて惡贋貨を吹出候儀決而無之筈と存候前文評說有之時ハ彼我交易ニ害ニ相成候而已ニ而ら貴國政府外聞も不宜相成候間余各國同列と共ニ不申入を不得其故ハ政府たる者ハ必兼々取極ゑる性合を以て貨幣を吹出へき而已ならず

に萬民贋金或ハ免許おしに吹出候貨幣ノ爲めに難澁無之樣不取計を
不得依て前文人心不折合評說差起る事無之貴國貨幣相場過分に顚倒
不致樣貴國政府に於て計策被致度賴入候此段可得貴意如此御座候以
上

正月　　ハリヱス、バルケス

東久世中將閣下

【參考】

第一　當時
天皇陛下御政府にて御鑄造之壹分銀も本銀何程增銻何程の目
方何程の

第二　貳分にも本金何程增銻何程の目方何程の

第三　天皇陛下御政府之外於日本大名又ハ外々之者にて壹分銀貳分
金或も金銀銅等にて通用金鑄造いたし候理有之候哉

第四　若右之理有之候ハヽ、御政府鑄造之金銀与外々之者鑄造之金銀
与致辨別候印にても有之候哉又ハ於政府金銀性目方等迄御取
極めの上御許被置候哉

右之條々早速御返書被下候樣いたし度存候此段可得御意如此御坐候
以上

於横濱英國公使館
（明治二年正月廿二日）
千八百六拾九年第三月四日

ハルリー、パークス

東久世中將閣下

【參考】

以手紙致啓上候然ては外國交易に用ゆる貨幣卽壹分銀及貳分金之相
場近來下落に及ひ交易に大害を生しなるの報告ありて扨千八百六十
六年第六月廿五日會議之節定なるにも壹分銀も純銀十分の九雜せ物

十分の一の貨幣其重サトロイ目方の百三十四グレインよゐ其數三百十一枚以ゐ洋銀百枚よ直はべし然る處當分ゑ右相場より大下落し大概三百四五十枚以ゐ直るゐ到ゑるゐ因て輸入交易ニ大害を生し且壹分銀を多分よ所持の外國商人よ大損を起しゑり右壹分銀下落ゑ儀も交易ゑ不同ニ起るよもあらず亦日本政府ゑ鑛枚買入るゑ約條を結ひしよ依り洋銀枚望み欲する人の多くゐりゑるニも非も惟當今日本政府の出も處の壹分銀も千八百二十二年ニ定ゑゑる品より其眞價劣ゑると及近來二分金ノ惡き品世よ流行あるとの路言より起りゑる由ニ御座候ゑゑば此ゑ枚案ずるよ路言の通て一分銀ゑ千八百六十六年よ定ゑゑる品柄より其眞價分厘も相違ある事素より御門政府の免許あるべき筈よ非も依ゐ會盟諸國と先相決議して右路言の雷外國交易ニ害枚生するのみニあらずこゑが爲ニ日本政府の信を失ふべき事あゑバ今閣下ニ申進ゑる枚得ず蓋し貨幣を正しく價直の如く造るも素より政府の任且僞金の世ゐ流行せるを禁せん事を能も右ニ付御門政府ゐ於ゐ右路言を止め貨幣相場ゑ不同ゐらん手段を施行有之度志願ニ候右可得貴意如此御座候以上

（明治二年正月十二日）
第二月廿二日

獨乙北部聯邦公使
フオン、ブラント

東久世中將閣下

一二　阿野公誠書翰「大隈重信等宛」明治二年正月二十七日

春陰濛々然者彌御清榮芽出度候陳者兩所共東下ゑ義被　仰付置候得共御用筋在之候條同伴ニゐ急々登京ゑ樣　御沙汰候且浮浪士ゑ說も紛々事件委曲被聞込候確證も御座候と被察候間右探索注進人體与同伴出頭ゑ樣從三條殿岩倉殿等被申聞候仍早々右申入度如此候也

正月廿七日　三字認

尙其府浮浪士之事件ニ付東下延滯相成候ゟも如何哉夫々手當も可有之義と存候何分一先早々上京之樣被申入候以上

後藤象次郎殿
大隈八太郎殿

（辨事兼典）阿野中納言

至急要用

一三　小松清廉書翰「大隈重信宛」明治二年正月三十日

其后益御清適御執掌奉雀躍候さて滯阪中も度々御來訪被遣殊ニ揚帆之砌も御餞別等被成下旁御懇意被成下不知謝處深肝銘仕候陳者僕も出船來海路都合能今未明着崎仕則井上等被會京坂之形行且兼ゟ御談之邊も則相話候清國使節一條井上ゟ頻々承候付兼ゟ御内存之次第粗相咄候處兎角當港ニ在留スルニ就ゟも清國朝鮮之商法第一之地故是非副使邊ニゟも渡海ゟ ゟし度との事ニ御座候ドツク一條も談合仕候處拾三萬弗金策之前急ニ出來兼候半其内此方之有高を取調不足ハ會計局ゟ御拂相成候樣ならハ別ゟ仕合との事今日ニ至り候上も兎角制鋏所附屬不相成候ゟも不相濟事歟と相考申候細々井上氏ゟ御掛合も可仕候得共右兩條小生ゟも先生迄申上吳候との事承候間何卒可然御盡力被下度奉願候山口も歸邑來未出崎不相成面會相調不申實ニ殘念之至兼ゟ承知之事件も井上氏等ゟ相頼早々歸東相成候樣吳々申置候間御安心可被下候當地異條も無之靜謐ナリ已ニ出帆ニ差掛要用迄得貴意候尙歸國之上御窺旁可仕候

頓首九拜

小松拜
崎陽

正月卅日

第四字

大隈先生閣下

二伸時下御自愛奉萬禱候後藤副島（象二郎）（種臣）兩先生方ゟも呈書不仕候間可然御傳言可被下候足痛清坐も相調不申大亂毫御高免可被下候頓首再拜

一四　後藤象二郎書翰「大隈重信宛」明治二年二月朔日

行違不得拜青候處昨日も御清安御上京可被成奉欣然候扨弟義昨日も早々
上京卽　參朝仕候處御評議席ニて明後三日之定出御船ニて東航可致被命
候勿論覺悟おがら心算よりも頗火急ニて坂府御用向引渡手殘も有之僅々
一兩日之間与相成候故不得止昨夕速ニ上途下坂仕候是非御待合も仕段々
御示談も申上度義も御座候處前文之次第不任心底段不惡御汲量奉願候
盟兄ニも或も御同航も哉与奉存候得共若も少間後も不被計候故一書捧呈
此段奉得御意候先も右要件迄乍匆略如此御座候頓首拜

二月朔　（參與兼大坂府知事）象二郎拜

大隈盟臺　坐下

追啓願も御用濟ニも被爲至候得者盟兄にも御同航奉祈候于時御示合
之貨幣並ニ商法營繕等之三司も段々探索も致候處隨而此儘御差置不
可然過日も御談申上候通極詳密御取調ニも不及義与奉存候弟も今暫
滯京候ハヽ御同樣可申上處此始末故此段爲念奉申上候盟兄被仰上之
節ハ弟も隨而御同意之段被仰上被下度此旨も旁奉得御意置候

又頓首

後藤生

大隈盟臺　坐下

御親展

一五　伊達宗城書翰「大隈重信宛」明治二年二月二日

只今令發靱候條及吹聽候御用片付候ハヽ早々東下待入候且亦先日足下見
込切支丹徒處置等之書付二綴東京ニ持參局中致密議度候條早々大坂邸迄
被差廻度明朝六字迄ニ達候樣可被取計候也

仲春初二　宗城

大隈八太郎殿

一六　五代友厚書翰「大隈重信宛」明治二年二月三日

今日も御勇健奉欣喜候然も御名卒爾粗漏の一冊差出申候處御笑覽被下候半何分御入筆御取直之上是非此度御滯京中ニ御確定被下候處御盡力奉願候且亦金札相場一條之儀粗御承知之通神奈川縣と打合候次第別紙之通ニ付金札ハ勿論金錢の相場と云へとも政府ゟ制スル之權おく商民時の勢ひニはかせ候外無御坐候ニ付是非速ニ御破斥御布告相成候樣奉願候尤當所之形勢東京ニゟ公然相場被相立當所ハ相場不相成との行違ニゟ引合更ニ不相成一統相困候由御坐候間此段分ゟ御願申上儀候恐々敬白

二月三日　五生拜

大隈參與殿下

二白此度ハ如何御座候哉東京之知友御逢も御座候ハヽ宜御鶴聲奉願候中井も兩日ハ面會不仕定ゟ盛かるゑし

【備考】前掲の正月五日伊藤博文の書翰と同じく金札相場のことに係る

一七　東久世通禧書翰「大隈重信宛」明治二年二月七日

於長崎英水夫暗殺壹件早速取調相付候旨長崎表ゟ英國公使迄先達ゟ通達御座候付政府より返答切迫ニ申立候事

今度フルーペッキ御雇入之事ニ付山口範藏（外國官判事）長崎表へ罷越候得共唯東京呼迎諸事談合ゟ不苦間敷候得共彼者も耶蘇教主ニ御座候間表向政府より御雇入ニてハ議論如何可有御座事

二月七日　東久世中將

大隈閣下

一八　中御門經之書翰「大久保利通宛」明治二年二月八日

御安全珍重ニ候抑今般造幣局取建ニ付是迄之弊害一洗幷大坂府取締等之義ニ付明日岩倉大納言三岡（由利公正）四位等下坂候右ニ付是非足下大隈氏等一應面談被致度候ニ付自然御乘船之御都合も可有之哉候へ共右之次第岩倉下坂迄御見合之樣可申入旨ニ候間此段申入候先ハ早々右申入度如此候也

二月八日　　大久保一藏殿　　經之（議定、會計官知事兼造幣局掛）

一九　由利公正書翰（「大隈重信宛」明治二年二月十日）

爾來愈御清安奉拜賀候陳者小生儀昨夕下坂仕候間御承知可被下候今日も何レへ御出勤ニ哉御都合承度奉存候否御答可被下候頓首

二月十日　　大隈樣　　三岡（參與兼造幣局掛）拜

二〇　中御門經之書翰（「大隈重信宛」明治二年二月十日）

追而右船之義輔相公ニも示談之上申入候事ニ候否御返書願入候也

彌御安全珍重存候扨も過日豐岡前大藏卿（隆資）東下ニ付御同船之事申入置候處又々三岡（由利公正）へ船之事輔相公ゟ被示候趣ニ付坂府判事ゟ外國便船有之候旨被申越候へ共横濱迄便船ニ而も何レ御貸入賃可入用儀先々此方ハ御止之方ニ致度足下東下之節豐岡同船之方ニ致度候此段今一應御打合申入候右ニ而都合宜候ハヽ重疊ニ候何分外國船貸（借）入之義ハ無用と存候先ハ右申入度早々如此候也

二月十日　　參與大隈殿　　經之

無事要用

二一　三條實美書翰「大隈重信宛」　明治二年二月二十三日

春寒未退候處足下彌御勇健奉職之事大賀之至ニ存候併勤勞苦慮之義萬々相察申候然者此度會計事務基礎經營之義ニ付ゐて別ゐ盡力拮据之段感佩之至ニ候猶爲

朝廷厚勵精盡力被致候樣企望仕候當時公務多端定て費も不少義与存候依之内々別段之譯を以て黄金三百兩乍聊下賜候間卽相達申候且連日之勞苦を相慰度別段酒肴一種乍輕微進入致候也不盡

二月廿三日　　實美

大隈四位殿

二二　岩倉具視書翰「大隈重信宛」　明治二年二月二十三日

彌御壯健欣然候抑昨夜着坂今日府ゑ罷出居候先時ゟ御待申居候無程御出仕ニ哉今夕ハ會計池田始京都府（京都府判事松田道之）松多下坂明日ハ是非楮幣相場御決義願度との事ニ候間今日ハ小生丈ニゐ是非々々面談申度候乍去屋敷ニ御出之由もし添嶋（副島種臣）御出會相成候ハヽ重疊此事ニ候新造貨幣之事楮幣混雜等之義一應御聞取給候ハヽ政府議も分明ニゐ大幸と存候其御樣子ニゟ今般來臨給候ゐもよろしく左候へハ小子ハ引取可申事と存候仍早々如此候也

二　廿三　　具視

參與大隈殿

【備考】二月二十八日諸上納并御拂物等當分正金百兩に付き金札百二十兩定と公布す岩倉具視是月十四日急遽歸京を命ぜられ二十二日大坂に至る

二三　ロベルトソン書翰　明治二年二月二十四日

日本貨幣之位下落せし一件ニ付命せらるし行事一己之論過日會議之節日本貨幣之價定らを且格外騰貴下落せしニ依ゐ商賣ニ大ゐる害を爲すべき与之主意ニ余同意を其原因且其害を防く余ゐ見込ゟ左之

如し

二種の通用金なる國にをて(則日本にドルラルと壹分銀なる如く上海にテールとドルラルなる事注意をなを)商賣懸引等に因り貨幣騰貴下落をる事なるへし商賣之景氣より起る金銀價當然之高低を他國に於る如く是迄屢日本にもなり且格外に高低し外國人にて既に日本貨幣を輸出せる事もなるなり金銀價當然之高低を衆人に及し敢を其事を愁訴するものなし然をとも日本おゐても商賣の懸引甚と六ケ敷商人等兼を見込に外をる事屢なり金銀座にを定價之貨幣を吹立て通用をる時を相當之利益もなるへき商法に此程大坂金銀座おゐて惡性之貨幣を吹立しに依り損毛を引起さゞるを得を右を全く不慮の事也大坂金銀座之所爲に付方今混雜之原因を余茲に述ふ商賣之衰微及ヒ國内の難澁となる貨幣の輸出を交易之懸引に因を輸出をるにならざをとも棹金銀を無益に輸入し夫レを以て貳分判を吹立るを因を右樣日本貨幣を輸出をるに至るべし

條約に取極むる貨幣之銀位より惡しき壹分銀を大坂にて吹立てし說なをとも余是を聢と承知せを條約に取極る貨幣之位を千八百六十六年第六月廿五日之約書定價且ツ其後取結ひし三ケ國條約面に掲載せる貨幣を言ふなり壹分銀之量目トロイウエート百三十四ゲレーンに下らをして純銀九分混物壹分を過るをならに

余貳分判性合等之義に付少しも知らを余考ふるに右も日本政府之勝手にて外國人之預る事にならに併し此一件捨置くるき事にならに何をにも取極めざるを得を

國内に貳分判之員數限をなを内を害にならに唯運送辨利之爲と心得たり然るに國内より充滿をる程貳分判を吹立て一度に金銀座莫大之利益を謀を し事過ちなり外國人之方にをて棹金銀之價と比較せずして貳分判を受取を し事過をなり外國人及ひ日本人日本貨幣に吹く棹金銀之價を篤与調へ棹金銀に替る貨幣之高を外國人より打明を時を金銀座之所爲良くなると

も害ニおらさるべし貳分判の引替を日本政府ニ迫るゐ外國人の心得違と於余考ふ日本政府おゐて貳分判を買上べしきれを追ゐ引替る主意ニて貳分判を吹立しおらん右買上ゑ期限定めゐらも故ニ外國人ニゐ直ニ買上を迫るゐ不正おりと思ふ

惡性ゑ壹分銀ゐらも日本政府ニゐ其壹分銀を引替る事當然と考ふ且右引替ゑ後政府ゑ益を謀ゐ其壹分銀を改て通用せしむるより直ニ吹替るへき事と考ふ又ゐ政府ニゐ海外より當國ニ來る人々ゐ能く知ゑる印を設くへし其印を惡性ゑ貨幣ニ押し人を惑ゐせさるべし

右貨幣ゑ引替を日本政府ニ直ニ請求もる企ニ余不同意おり此一件を申出もゐき事と考ふ若余自己ニ政府より受取るへき貨幣ゐゐて其貨幣惡性たるを知り受取らさゐし時ゐ余直ニ政府ニ苦情を申立つべし金銀座より出る惡性ゑ貨幣ニ付其持主ニ起る損毛を日本政府ニて引受くゐき哉否知らざゑとも右樣ゑ苦情ゐ銘々申立るべき筋ニて物體より申立るゐき筋ニゐらに交易衰微ニ付償金を求むへき筋おく且充分探索を遂る事おく日本政府に對し不相當ゑ事を物體より求むるゐ至當と思ゐざるゐし金銀座役人貳人既ニ入牢せし由且政府にて貳分判吹立を停止もへきを命せし由を聞きたり右等ゑ請合ゐゑとも通用ゑ爲メ吹立ていまゝ用ひさる貳分判を不殘其筋より取上ゑし旨を聞ゐて其事尙慥おるべし

末文ニ商人悉く會議し貨幣取扱人を任もるを要も其ものゝ職掌ゐ行事ゑ差圖にて外國公使ゑ手を經て日本政府官員ニ接もる事おり

（明治二年二月二十四日）
千八百六十九年第四月五日横濱　ジョン、ロベルトソン

二四　ウヲルス等書翰「外國官宛」明治二年二月二十四日

日本貨幣ゑ價下落せし一件ニ付命せらゑし行事ゑ衆論

去月廿九日商人會議ゑ節命せられし行事其席ニ申出し事件を篤与談判ゑ

上日本政府大阪金銀座より惡性之貨幣を吹立ゐニ依り交易ニ不都合を釀せし事判然たるを以て日本貨幣下落せしニ付起る損毛を外國商人より日本政府より請求せる事ニ決議せり

右も壹分銀の價を極る千八百六十六年取結ひし約書定額ニ添ゆる第三則より基き決議せるものゝ一分銀の量目トロイウエート百三十四グレーンより下らもして純銀九分混物一分を過ゑゝらゝセントゝ一分銀百分ノ一ゝり右約書中此規則ゝ日本と取結ひし新條約及ひ本年調印せし獨逸北部聯邦之條約面ニ取極めしものゝよして右條約第十ケ條ニ左之通掲載せり此條約ニ添ゆる交易の規律ゝ此條約と一體とゝせるものゝよして双方共堅く之を守るへし与ゐり然ルゝ此程銀位下りゐる貨幣吹立ニゝ也

右決議せしニ付商人等不日會議し貨幣取扱人を任せる事ニ付其席にて決談せるもの一兩人命せゑき事を要も右取扱人之職掌も余等之愁訴を各國公使ニ申立て償を求むる權ゐるへし

償を申立る時ゝ惡性之貨幣吹立を停止し當湊又ゝ東京に金銀座を取建て其所ゝて外國貨幣及ひ棹金銀を定價之日本貨幣ニ引替るへし且定ゑたる銀位より下ゑし貨幣にて今損毛ニゐる丈ハ相當の割合を附ゐゐる上ニゐ定價より下ゑし貨幣を買上るへき事と於余等考ふ

（明治二年二月二十四日）
千八百六十九年第四月五日横濱

ゼ、ジ、ウ　ヲルス
エフ、ゲイセンヘーメル
ゼ、マムメルスドルフ

二五　外國官判事書翰「大隈重信宛」明治二年二月二十六日

以急飛致啓上候然も御承知之通過日以來貨幣之義ニ付各國公使ゟ縷々苦情申立候ニ付過日東京貨幣司知事（足立忠次郎）御地ゟ罷越逐一可申立候處追々御取調ニも相成候趣然處宇和島公（外國官知事伊達宗城）ニも右貨幣之事件御取調之半ニゐ御地御出立

ニ相成委細ハ貴所様ニ御委任ニ相成候趣然處此節英公使出府又々再三之
催促狀差出候上御談判も有之候處右之節大ニ憤怒最早四十日も相立候ゟ
何様之御答も無之且知官事（伊達宗城）公ニハ第一等官之權を御持乍被成諸事大隈ニ
御委任と而已御答ニゟハ甚不相當之事抔と種々之議論申張最早昨今ニ指
迫一通之御確定御答書無之ゟハ不相濟處貴所様ニも未御着府不相成何分
東京ニゟハ議參衆初會計等ニゟも御確答難被成趣ニ付至急別紙之件々大
略ニゟも以急飛御答可被下候
一長崎ニおゐて英水夫暗殺人御處置之儀も未々政府ゟ如何御報知無之不
滿意之段英國公使申立候ニ付是も大略御處置振并人名等御申越可被下候
右之件々至急得貴意度如此ニ御坐候也　恐々謹言

外國官判事

二月廿六日二字

大隈八太郎殿

尚以山口範藏（何方）歸京ニハ相成候趣ニ候得共崎陽之件々未之報知無之且又
同人ゟ五島之一件等も大略ニゟも至急申越候様御申聞可被下候以上
貨幣之儀於當方も猶明日會計官判事不殘同道　西城ニおゐて當地丈之
決論致候含ニ付此段も一應申上置候以上

二六　外國官判事通牒（「會計官判事宛」　明治二年三月）

今般貨幣御改鑄ニ付外國人一名御傭入相成候積過日　廟議御決定相成候
得共書面を以琢与御沙汰相伺置不申候ゟハ右御雇之もの到着之節も御官
ニゟハ接待方等御指支可相成哉ニも被存候間別紙之通相伺可申与存候御考
案如何ニ候哉有無共早々御申聞有之度此段及御懸合候也

外國官判事

三月

會計官判事御中

【別紙】

今般貨幣御改鑄之儀ニ付ゟハ横濱在留外國人之内ニゟハ議論沸騰則別

紙譯文之趣ニゐも粗事情相知レ居此後差迫り金銀坐ゐ外國人立會可申等ニ至り候も實ニ御國辱ニ有之候間寧ろ此方より先しゐ外國人之内右之工技ニ長し候もの御傭入相成候ハヽ右立會之論も辯駁ニも不及消滅ゐ為し候而已あらゐ實も若干之御利益ニも可相成義ニ付過日神奈川在勤判事井關齋右衞門罷出會議之上彌御傭入之方ニ御決定相成候ニ付町田五位ゟ英國公使ゐ内談之上同所十一番バンク總裁ロベルトソンゟ可然人物周旋可致与之取極りニ相成申候就ゐも右御傭之もの到着之上も速ニ當地ゐ呼寄居所其外共相當之待遇御仕向ケ可相成筋与被存候間右御雇相成候趣幷到着之上接待方等兼ゐ會計官へ御沙汰無之候ゐも其節ニ臨ミ差支可申候間至急書面を以御沙汰御坐候様仕度此段兩官申合相伺申候以上

三月

外國官判事
會計官判事

行政官辨事御中

二七　町田久成書翰「都築莊藏宛」明治二年三月六日

貨幣局御用見込ニゐ英人御雇之義御決定相成候由ニゐ井關齋右衞門ゟ縷々之申越則バークスゐも内談之上十一番バンク總裁ロベルトソンゐ面談之上委細申入置猶次之出帆飛脚船便ゟ問合候積ニ有之候飛船も昨日出帆ニ相成間後ニ相成候故次之便船迄ハ凡十日も間可有之候ニ付猶ロベルトソン与も熟考之上引合可申との事ニ付寺島ゐも談置小生明朝ゟ歸府可仕候ニ付委細も御直話可申上候

三月六日

都築莊藏殿　　町田民部

其外外國官御中

【參考】　木戸孝允書翰「中井弘藏宛」明治二年三月八日

大取込大亂筆御推覽奉願候御東着之上は大隈氏へも可然御致意
奉願候弟も近來尤大衰弱御垂憐可被下候以上

朶雲奉拜誦候彌御清適奉大賀候さては如貴諭京地も種々之議論沸騰
實以不安事而已にゐ御座候節角大隈氏へ面會仕得と東西之情實も申
陳高論をも承得仕度と渴望罷居申候處行違ひ不得一面遺憾此事に御
座候

一御基礎と申事は於弟は別に議論無之已に昨年
御誓約を被爲立堂上諸侯其數已に幾百決誓仕億兆へは
御宸翰を以御示し被爲在於今日別に御基礎と申事は有之間敷只此事
之立と不立に有之可申天地一變之御大變革に付元より議論如山位之
事は有之申候も當前之事と愚考仕候只於
廟堂百折不撓と申四字之外更に見込も手段も無御座候乍去於心は至
誠至忠にゐも性質頑陋之ものも亦不少依ゐ只其ものどもをまた誠意
誠心を以誘導いたし候事實に肝要至極と奉存候其誘導之工合におゐ
ては得と全局之形勢を視察し偏頗に不相成樣盡力無之ゐは益怒るも
のは怒り怨むものは怨み妬むものは妬む之弊增長始終自ら壞り候處
へ落入
興國興起は却ゐ無覺束歟と竊に愚考仕歎息致し申候實に成否は誘導
料理之邊に係り候事不少候此度は種々と姦計を廻らし大に人氣を搖
動いたし御厄害を成し候に付ゐも枝葉に至り候ゐは一向迂遠より被
欺候ものも不少巨魁は却ゐ只己之不平より姦計を以一時を惑亂し決
ゐ誠心を以盡し候事に無之姓名も世間へは大に秘し居候樣之心底可
怨之事に御座候依ゐ六七輩捕縛之次第に至り申候尙此上終に其頭は
罪を鳴らし金皷を以御所致無之ゐは相成間敷乍去元より屈不屈之上
之事にゐ御座候總ゐ丁寧綿密に無之ゐは不相成候
一大隈氏初發よりも大に盡力之事にゐ御座候處何分にも邪蘇之御所

致は速に何と歟判然無御座ゟは不相濟事と奉存候追々見込ニ相違より粗暴相働きしもの心事におゐて毫も私心より不出ことゝ雖も大典を犯し候ものは斷然と御所致御座なくゟは決ゟ後來ニ事百事必瓦解と奉存候乍去然る上は於
朝廷も曖昧ニ事件有之候ゟは始終人心ニ居合は甚六つケ敷と奉存候何分にも至急に御所致被爲在度事件は邪蘇ニ一條也何卒大隈氏へも御論談有之度元より大隈氏疎は無之事にゟ佛前ニ說法と奉存候得共懸念ニ餘任序申上置候尙會計ニ一條も尤差向ニ大事件にゟ何事も此基不相立ゟは忽總瓦解に至り申候間吳々も此二件至急至迫ニ事と奉存候御實事ニ相擧り候邊只々千禱萬祈ニ至に奉存候

二件程克大隈氏へ御噺

一西鄕山縣ニ一條得と岩卿へも申上候處速なる方旁都合よろしき邊も有之少々不條理歟は存不申候得共終に如別帋御達に相成申候間何卒大隈氏へも得と御噺且宇和島侯始御一局ニ處可然奉願候右御達ニ次第に付外國官よりニ御印鑑手形長崎神戸へ相廻り候樣御周旋奉願候可成丈け迅急を貴ひ申候且又諸藩ニ內又は宮堂上方御家來草莽ニものにゟも誠實有志にして固陋ニものは逐々西洋其外へ被差越度少々御入費相かゝり候とも今日ニ事節義家ニ識見相開け候より政府ニ事相擧り候事は無之是も年々歲々相開け候に隨ゟ人數も少く相成候故何分にも此處へは御心切に御手を被爲盡度奉存候先は乍亂筆御答申上度奉呈候其內時下別ゟ御自玉第一に奉存候匆々頓首拜復

三月八日晚

尙々

御東着ニ上は實に東京府ニ取締別ゟ御大事ニ事に付元より拔りなき事と奉存候へ共後藤參與へも得と御噺可被下候其手都合は已に相定り居申候以上

弘　老　兄　　允

御内密御火中

二八　英商オールト書翰「大隈重信宛」　明治二年三月九日

大阪ニ於て千八百六拾九年（明治二年三月九日）第四月二十日

副知外國官事

大隈四位閣下ゟ呈す

貴國政府ゟ約定致置候金銀銅當節輸入致候ニ付過日閣下ゟ面謁致し早々右銀代御渡之上品物御請取有之候樣申上候處何レ三四日内ニ決定可致旨御約諾相成其後追々延引ニ及既ニ今日迄二十日も相立候得共何たる御沙汰も無之日々手代之者を以諸役所ゟ御催促申入候得とも是又三四日内ニ決定致スゟ申事而已ニゟ一向相辨不申如此貴國政府ニ於テ約定御違背之思召有之候ハヽ、拙者之一分相立不申最早一日も猶豫相成兼候就ゟて實ニ不本意之至ニ候得共若亦明日中ニ閣下ゟ拜謁致右事件取纏不申或て今晝前迄ニ壹ケ月壹分之利足ヲ加ゟ右代銀御拂入無之節て無據當湊コンシュル役所ゟ訴へ出其裁決を仰き可申候且亦右約定御違背ニ付ゟて洋銀五萬枚之贖銀て素り御拂入之義御承知与奉存候

オールト拜具

尙早々御返事可被成下候

二九　寺嶋宗則書翰「町田久成宛」　明治二年三月十一日

今朝拙者十一番オリエンタルバンクゟ差越候約定之ケ條同人（ロベルトソン）よゟ書面ニゟ唯今差出譯之暇無之候ニ付其儘差出候ニ付御一覽之上御建議金壹萬弗來十七日迄ニ御差送可被成候

大　意

一主宰　壹人　月給五百弗ヵ六百弗迄

一助勤　貳人　同貳百弗ゟ三百弗迄
一右三人　三年雇期限
一政府之意ニ應セス暇差遣候節も六ケ月之給を與へ船賃ヲ拂
一罪アル時ハオリーンタルバンク社中ニゟ法を設引請可申事
一月給も日本着ゟ拂
一般賃旅用三人ニゟ五百五拾ポンドステルリング
一分拆器械貳千磅
一右貳口凡壹萬元とゟ
其餘細事も別帋ニゟ御承知可被成候來ル十九日飛脚船發ニ付十七日
迄ニ金子幷返書御差出可被成旨申立候間御報早々御申遣可被成候也

三月十一日　寺嶋陶藏（參與、外國官判事）

町田五位殿

三〇　五代友厚書翰「大隈重信等宛」明治二年三月二十三日

御袂別來御安康御奉職奉恐賀候然者當港御出帆之節ハ通詞遲參ニゟ大不都合ゟる由惡說を受候ゟも不得止夫も羽太周介をいさ免る而已御海容可被下候扨御出立後十一日ゟ加賀子と共ニ登京御命之次第岩倉卿始其外諸先生へ申伸候處因循而已ニ付決談無之とや角都合いさし去廿日引取申候就ゟもいつを東京會議之上ゟらてハ何事も確定難相成儀と觀念いさし居申候オールト拂一條且ホートウエーン借財一條昨今盡力中ニ御座候間後便申上候樣仕度比日金札相場日々下落既ニ今日ハ百七拾九兩と相成困入申候右ニ付會計官邊ゟ種々異論相立候由ニゟ一昨日万里小路卿下坂相成愚論承り候付加賀兩人ニゟ辨解いさし置申候乍併今樣の下落ニ及候ゟハ人心沸騰難御形勢ニ御座候間一策を旋申度其爲金札引當ニゟ外人ゟ拾萬兩位金を借り夫々京師會計官へ八萬兩程正金在合有之候ニ付合て拾八萬兩位を以京坂兩所ニゟ金札買上申度今日も評議いさし僕金策ニ取掛居申

候御地ハ如何御座候哉當所計直段相進候ゟも御地不相替下落いたし候ゟハ買止候へハ忽可相下る水泡と相成候付御地之形勢御ゟらせ被下度尤去ル十六日の相場三拾七八匁と申儀迄ハ相分其後更ニ不相分候御地も當地同樣金札下落いたし居候も是非當所同樣の所置御付被下度外國官ゟ掛合之返詞差出候由承ニ付此段大略御通信申上度恐々敬白

三月廿三日夕　　五代（大坂府判事）才助

大隈參與閣下

山口
中井　明府

貳白　通商司も未不相極御立以後至急の正金拂追々相重ホートウエーン約定も未相成大苦心御推計被下度ホートヱン方ハ兩日中ニも約條證書取替申筈尚追々可申上候

三一　東久世通禧書翰「町田久成等宛」明治二年三月二十五日

今日英公使談判

昨日指出候ヲヽシユン、ゲヒテイン幷東京岡士馬車より引下シ士官之者拔刀致懸以之外之儀と大憤怒毎度憤怒ニ出逢候得共今日之如キハゟし既七日前ニ肥後藩公使ニ無禮致候ニ付毎々申立以後御取締相成筈之處依然トシテ前日如シ尤此方よりハ尊敬之道ヲ盡し車を扣居候處何等之譯を以左樣無禮被成候哉懇親々々と口ゟとゟへ右之所業戰爭を好めも今より三千兵隊を金川へ出し天子と雖とも一歩を東京之地を踏しむへからも實ニ口を極て政府を罵詈致し候乍去一々彼ニ理アリ

予甚氣毒譯故岡士船將ニ謝スル爲ニ士官ヲ横濱ニ可遣と云しニ彼昨日之書面ニ基キ急彼相手を取調罪を謝スヘシ同車之者へ一々謝スヘカラス書面通場處刻限等相分り御座候間急々調相付候上横濱へ判事壹人罷越候方可然猶委細之儀問糺可申候得も急々御遣し候ても可宜旨申候定ゟ今朝之

書面反譯出來相成候へも辨事へ急々指出品川大森宿驛取ゟらへ名前相知
不申ても甚不行屆御座候
元來始より政府不行屆故ケ樣大事件も出來候人民ゟ爲世話致サヌ政府ナ
レハ其實無し昔德川ゟ方宜取て替り可申方可宜其外洋人種ヲ種付ナト攘
夷ナラハ卽座ニ可及刄傷ゟ議論も御座候
一函根迄百人計出し置大名通行ゟ節壹人宛附添無禮無之樣供頭ゟ者へ申
諭可然人ヲ出し置一應ゟ申聞位ゟてハとても十分ゟハ行屆申へカラス
と申候
一已後ハ馬車ニ鐵砲ヲ乘置候間引下シ候得者直樣發砲可致拔刀致候者へ
對し發砲ハ當り前ニ御座候よし申候若又洋人ヲ輕蔑致候兵隊澤山御座
候得も英兵隊ヲ勝手ニ遊步爲致可申英兵隊も日本人を輕蔑致候得共政
令行屆居候故暴動ハ不致候得共日本人ゟ暴を働候得も我ゟも暴動可致
候明日よりも下知致へくと申候

一此後前の如き擧動有之候得も如何樣とも不可致忽地戰爭ニ可相成相考
候
別手組ゟても壹人宛可相付歟誠大事件ニ御座候急々存寄も御座候得も
承知致度先さしむき一昨日事件取調ゟ下知早々可有之候以上
三月廿五日
一今日品川知縣事召出し行政官より申付置候得とも尙又篤与不相調てゟ
前途甚懸念唯今ゟも不都合相生し可申やも難計實ニ難捨置相考候間御
盡力可被下候以上

町田殿
山口殿

東久世中將

【備考】三月十八日品川驛にて熊本藩士某、英國公使に暴行を加ふ、横濱に於ても亦佛公使館員に暴行を加へたるものあり、而して二十三日再び此の事あり、英佛公使等大に怒る、これより交渉數度大隈重信常に其の衝に當る、三月二十八日東久世通禧書翰、同日英國公使パークス書翰、四月七

日同人書翰、四月十一日伊達宗城、山口尚芳書翰、四月十二日中井弘書翰
參照

三二　中井弘書翰「大隈重信宛」明治二年三月二十五日

昨日も大醉倒ニゐ甚失敬千萬平ニ御高免思召可被下候此羽織ゟ江戸の名物不取敢進呈いゑし候間御落手可被下候何ゟ參上旁可申上候得共其内如此御座候ゝ

三月廿五日

長谷川の宅ゟ暫時御見合相成度何ゟ　御着輦後速ニ萬事御決裁と奉存候

島津少將
家來
溝口吉左衞門

外國官出仕

被仰付度候事

記錄助勤ニゐもよろしく御坐候　右同

橋口良助

右之者一往御雇を以

外國官吟味役試補

被仰付度候事

右兩人共一往（公用人留守居）ゟ御掛合之上御命被下度候事

大隈四位殿　要用　中井弘拜

三三　東久世通禧書翰「大隈重信宛」明治二年三月二十八日

一翰呈上候右書翰唯今到來候（小生）此間散々仕合又々出頭致候義何共赤面之至極御坐候且明朝も段々御用向も御坐候自然御くり合出來候得も御出被下間敷哉貴所御指支御座候得も早速伊達黄門（宗城、外國官知事）へ可申遣候否御報承知致

度早々以上

三月廿八日　　東久世中將

大隈知事閣下　大急

三四　英國公使パークス書翰「伊達宗城等宛」　明治二年三月二十八日

以書翰申入候（大隈重信）副知事昨日附之御書翰外國人東海道ニ於ゐ
天皇陛下供奉之士官之供ゟ受失禮候儀ニ付ゐ之書翰今朝落手ゐたし候隨
ゐ右御書翰別紙御布告書之内ニ改ゐ御相談不致候ゐゑ不相成廉有之候且
明日本國之便船を以不幸之事柄早速本國ゟ申通し候間副知事此公使館ゟ
明朝第九字御出張被下御相談之上ニゐ此事可然相整候樣致度相望申候右
之趣可得御意如斯御坐候以上

三月廿八日　　英國公使
ハルリー・パークス

伊達中納言殿
東久世中將殿　閣下
大隈四位殿

三五　會計官通牒「辨事宛」　明治二年三月

諸上納幷御拂物等當分正金百兩ニ付金札百貳拾兩ニ御定相成候旨此度更
ニ御布告有之候處當地下方相場昨今下落いたし金札壹兩ニ付四拾匁以下
三十四五匁ニ有之候間金札百貳拾兩ニゐハ正金百兩ニも難引當候間右御
布告之通取計候ハヽ於諸向も以後も夫丈ケ之代價ニ引直し御買上等可相
願義ゟ付差支も有之間敷候得共堤防其外營繕御入費等最前正金を以見積
置候分此節ニ至右之御拂出ニ相成候ゐ者致難澁候義ニ付必混雜可致其外
月給御手當向等當地おゐて銘々遣拂候分ハ定額正金之高ニ相當り不申候
共其心得を以仕賄候ハヽ強ゐ差支も有之間敷哉ニも候得共金札壹兩四拾

夕已下ニゐ者貳割ゟ貳割五分程之減しニ相成候間是以末々ニ至候ゐ者實以難澁可致旅費等も先ニおゐて仕拂候義故別ゐ差支可申一體金札正金之無差別壹兩ハ壹兩与御定メ相成候義者格別相場立御差許相成候上通用不致相場を以御拂物御渡相成候儀者至當之御所置与ハ難申候間右者得与評議之上決定いたし度候間當地之儀者右決定迄是迄之振合を以御渡物者都ゐ時相場を以拂出し取計可申与存候此段及御打合候也

三月　　會計官

辨事御中

三六　山口範藏書翰「大隈重信宛」　明治二年四月朔日

昨日
皇居ニて入御覽ニ候布告草案ニ付北島ゟ別紙之通り申遣候可然ニも奉存候此旨奉伺候御異論も無御座候半ハ急速府藩縣一般ゟ御布告相成候樣御運被下度候府内ハ今日中金札相場御廢止之布告可致積り右ニ付ゐハ別ゐ差急き候ニ付其御含ヲ以テ御上木へ出シ被成下度此段可得御意如斯御座候以上

四月當賀

大隈閣下

山口範藏

三七　英國公使パークス書翰「大隈重信等宛」　明治二年四月七日

以手紙啓上ゐ仕し候然ゝ此度横濱日本人住居之市中ニゐ外國人ゟ對し無謂打擊之仕業有之候處日本政府ニおゐて各人取押方且ゝ右體之儀以來無之樣御防禦向十分不行屆ニ付各國公使外國人警固之たゆ運上所又ハ本町通り外レニ於ゐ外國人警固當分之内右一條相治り候まて不差置候ゐゝ不相成義与考量致候間別紙寫之通右警固之次第入御覽申候隨ゐ外國人或ハ家財什器等

天皇陛下政府ニ於ゐ條約面之通御防禦無之ゐも不相成義御承知之段も於私不審無之候間昨年第七月中之通此度之儀も御承知被成候事与存候右樣取計ひ候義ハ重大之事件出來不申候樣致候譯柄ニ御坐候隨ゐ閣下ニ於ゐ右兩所ニ外國兵隊番所取建候事御さし圖早速有之候樣ゐゑし度存候右之趣可得御意如是御坐候以上

四月七日　　英國公使　ハルリー・パークス

伊達中納言殿
東久世中將殿　閣下
大隈四位殿

三八　楠田英世書翰「大隈重信宛」明治二年四月九日

其後ハ御無音各處遠々何事も蕭索之至候偖貴所樣東京御著も外國官ゟ知らせ相成杉本氏ハ如何候哉島も當時爲何噂も無之大木ハ當二月中ニハ是非とも歸國之積之由此前當府ゟ文通有之副島江頭（一平）古賀抔も折節御面會可被成と從新潟蕭然相覺候

荒增當縣之樣子左ニ申陳候

一當正月京地發足之末同月十六日夜四ツ比當地參着新潟在勤之人誰相尋候處長藩高須梅三郎と申人之由右者明十七日早朝四條（隆平）殿隨從出立相成趣宿主ゟ承申候何等之事候哉無覺束ニ付直樣相尋見候處西園寺四條殿揉合より出共ニ不體裁之至ニ御座候偖ハ僕進退去就之儀も相考先以京師急飛相立知事申立候ゟ外無之ニ付幸東京大木へ壹通差遣其段申入今先在府罷在候處信濃川分水一條ニ付土民騷立中々大勢相成關屋村と申處ニ相集人數壹萬五千程も有之由右ハ着掛十九日之事ニゐ先々當府在役人中申合取鎮方相懸五六日之處爲其大ニ心配仕候此事ニ付ゐハ色々事情有之候從夫今日迄共和政治ニゐ是迄越後府各局出張之人官判事抔

相語候以大體之處ハ體任致決談知事申立日夜相待申候處あらぬ方ニ越後府被相立新潟ハ縣被相建候是ハ如何之事候哉主と成誰いゑし候哉坐上之論と實地之處ハ大ニ雲泥之相違有之實ニ不體裁之事ともニ候

一新潟全國之權無之ゑ不可然越後府新潟相兼候ハて不相叶就中當時新開港ともニゑハ片々分斷相成候ゑ共ニ不立行事情御坐候故ハ國内銅山石炭鐵數多有之大體多寡之數も調ゑ別紙いゑし置候此事早急其仕組可仕と存候得とも管内中ニ無之依りゑ不得止事越後府ゐ懸合不申候ゑ不叶懸合示談候ゑ不相碎今日迄手を押罷在候物產當港ゐ夥敷相集度候得とも全權無之ゑ不埒明奥羽信越之白糸種紙色々之物產不少手を付當港ゐ參り候樣仕向不仕候ゑハ新開港之詮不相見實地席上と並ゑ御推察可被下候

一新潟之儀縣被相建旁外國貿易いゑし候樣偖管轄之地更ニ無之當所而已ニゑハ漸六百石計之地ニゑ彈丸黑子一村落ニゑハ迚も縣名相建不申惣しゑ當港之人別三萬人よ萬一飢饉抔いゑし候ハヽ如何して可救哉第一等之知縣事一年之月給も無之笑止なる事也兎も角も全國一府ニ極申候以後必蝦夷開拓も可有之其節ハ越之新潟り本據なるへし十分之勢力無之ゑ不可然之

一佐渡

右新潟ゐ管轄無之ゑ不可然何ゑ夷船入港之節碇泊いゑし左候ゑ新潟往復之條約面之當時御改革ニゑハ越後府之管轄と相成候又條約面佐州全島夷人遊歩規程之事候得ハ當港ゐ管轄可然之

一條約面新潟を眞中ニして四方十里之處夷人遊歩規程之事候得ハ條約面通其郡内是又新潟ゐ管轄可然候左候得ハ廿萬石よ漸卅萬石計之知縣事相應さらん

一僕頃日ゐて所存ニハ信濃川分水歎願ニ付幸之事隨分治河仕組相定右堀割と申候ハ百五六十年以來土地之立願ニ有之利害明白之事候へとも小

藩寄持之土地多大分之出銀不相叶夫迚幕府ゟ手を付不申故政之費是迄人民之難澁無申計入費之處願候ニ依り相積候得ハ卅萬金よ之事ニゐ然も永世所利ゑ廿四五萬計之現利相見候其上治河成就候ハヽ傍沼池を掘落し海ゟ流し候得ハ十萬廿萬之新地開發可有之と被存候當三月初旬右爲見分所々出張いゑし粗成算相成大ニ土物を起し茶漆銅山石炭硝石等之仕組相始外十分之地利を起し内政敎を盛ニせゝやと存居り候處是又當時ハ無詮事相成候

一此際壬生殿坂田潔様着ニ付直様面會全國一府之事熟談いゑし所詮御改革之事候條新潟をも越後府ゟ御合せ相成候方行政官終末之定論ゟるへく旨新潟ハ越全國之咽喉全越ニハ新潟之腹背惣身之ことし片々ニゐ迚も運動不可然候段申碎き候得とも外國交際方極々無案内之由何も固斷り相成候前原（誠越後府判事）も坂田も惣體之見込更に無之候僕儀實ニ殘心不斜快々之至ニ不堪候

一何事も當時之様子候得ハ暫之處先々外國抔頗心得度存慮ニ相成是も權柄無之ゐ不相叶可成丈其御運被下度外國判事と縣判事と離々相成候情實有之候ニ付知縣事にゐ外國兼務と歟官判事にゐ兼知縣事と歟名實一途ニ相成候方極宜敷都合有之御遙察可被下候何卒貴所様外國方御全務之由候條一寸當地御運被下度色々御咄も有之此旨態々用書中候尙期幸便之次候恐々不具

卯月九日　　十左衞門

八太郎様

三九　伊達宗城書翰（「大隈重信宛」明治二年四月十一日）

愈御清安令賀候今朝十時ゟ出縣候心得之處夜來發腰痛令難澁候故不參候條今日之處可然賴入候尤少よても快候ハヽ夕景よ至候とも補相（三條實美）へ參り昨日應接通の事故斷然御處置之義ハ可申立と存候赴次第歸途茅屋へ立寄可

給歟忿々不備

四月十一日

尚今日不參パークスへ可然希候也

大隈四位殿　　宗城（外國官知事）

急用

不及返事落手可承候

四〇　山口尚芳書翰「大隈重信宛」明治二年四月十一日

益御清適昨日ハ御苦勞パークス常例之憤怒五官之顔容滿目如見爾來一層磨勵之樣与可相成竊ニ奉喜悅候今日ハ御轉宅よ御決定被成候哉今暫ク御見合ニも相成候歟鳥渡御尋申上候否此者ニゟ御知らせ被下度奉希望候いつゟ後刻ハ拜姿萬々先ハ此段御伺旁草々頓首拜

四月十一日

大隈參與閣下　　執事

山口拜（尚芳、外國官判事）

四一　井上馨書翰「大隈重信宛」明治二年四月十一日

過月廿六日大坂着同廿七日岩公、加賀權作其外と金札を救フゟ論を約シタリ先五百萬元トルラル外國ゟ借金センヿヲ論各同意よて岩公より内命アリて再ひ當地下りヲールトゟ賴彼も諾シ凡拾ケ年賦リ八朱迄世話料百分ノ一ヲ遣スト約ス併も若し御地よ於て右等之論起り未決候ハヽ此方ハ段々入込候事體も有之御地之方御止メ可被下候事體ハ追付岩公御談之上よて東京行可仕候間全功を爭ふて申よ無之候間是非とも弟ゟ御任せ奉懇願候勿論此ヲールトハ人物よ劣しからサル事ハ篤と承知之事故決ゟ被致候御氣遣ハ被成間敷候事實切迫之時ハ奸物を働かせ候方早ク出來候故よ候書他い曲ハ不遠内拜青萬可申上候匆々拜白

四月十一日

二白會計如麻實ゟ御苦心奉洞察候決て傍觀之念更ニ無之候以上

八太郎兄　御内覽　　聞多

四二　中井弘書翰「伊達宗城宛」明治二年四月十二日

拜見仕候處松田兩人達令之者ハ五十日之謹愼と申事有之右ゟ兩度も刀ニ手を掛候ゟ頭役之命も違背いたし旁諸官ゟ難題相掛候者明律ニゟ御處置相成候ゟ此末幾度となく行動し申儀ハ相止ミ申間敷愚按スルニ間違歟と奉存候何分朝命を輕蔑しゝる大典を以見る時ゟ少シ輕重有之儀と奉存候今一往御吟味相成度奉願候自然明律のミを主張し我朝の典律從來之法律も折衷無之候ゟ兎角此末再三再四御國難を釀成し甚以込入次第と相成可申哉と心配仕候何分御取捨之程奉願上候以上

四月十二日　　中井拜

（外國官知事、伊達宗城）
知官事公閣下

一昨日公使之說ニよる時ゟ刀ニ手を掛候付下車いたしたる趣を以見る時ゟ鐵船之將必ス刀ニ手ヲ掛ゝるゟ恐怖しゝるものならん口上計ニゟは下車致すましと相考申候如何

四三　伊達宗城書翰「大隈重信宛」明治二年四月十四日

數刻之應接苦勞存候盡力ニゟ償金一條も多分如懸合可相濟と存候明日ハ十字ゟ裁判所へ參十二字頃ゟ可歸と存候於足下ゟ貨幣且長崎暗殺兩條被及談判候末被歸候や承度候也

四月十四日

四四　野村盛秀書翰「大隈重信等宛」明治二年四月十六日

生野銀坑も既ゟ佛之土質家を被遣て來年迄ニ數十萬斤を得る之御目的恐

喜セリ然りといへ共此佛人既ニ我藩（鹿兒島）ヨ來つて金銀坑を悉く見歩きて頻ヨ
狡猾の働を爲んとせし事ありて關係之役人等大ニ憤り漸く破談して仕舞
へる末浪花ヨ行て何等之事ハ生野へ御頼之譯ニ立至候や畢竟前後迫切之
究策より三岡（由利公正）先生等其人を知らゐヨ頼ミ込みたる譯共ニハ無之や定ゐ五
代兄よく御承知成べし生野の一ツハよし皇國中奥羽の金銀佐渡等を始め
過分之坑へ御手被付ヨ付ゐもよく〳〵其人を御選ひに成らゐも實に不相
濟機會之然るヨ亞（米國）敎師ストーク何歟之序ヨ土質學之人若し御頼共ヨ相成
候ハヽ隨分周旋可致申し亞も申迄も無之カリホリニヤ邊之銀山へハよ程
功者も數人罷在りよし尤同人等之周旋成らハ右之佛人見ヨ樣ニ惡き者ハ
有之ましく返ゐ〳〵佛人も外ゐも御遣ひ無之樣奉願候此ものハ例之モン
フラン彩る山師ゐ列越したる同盟中彩ゐは恐るべし〳〵亦モンフラン連
之事ハ薩人ゐ外ヨ委しく其原因亦人物を知ア得候人も無之与奉存候此事
小件ヨゐらゐ得と御考慮可被遣候已上

野村

卯夏十六日

大隈殿
井上殿
五代殿　御内披

四五　大村益次郎書翰（「大隈重信宛」明治二年四月二十二日）

先日御談之戊辰丸故障有之青森より差越不申候間外國官より被差越候者
之儀ハ別船ニゐ御遣し可被成候此段得御意候也

四月廿二日　大村益次郎（軍務官副知事）

大隈四位

四六　英商オールト書翰（「大隈重信宛」明治二年四月二十二日）

洋曆千八百六拾九年（明治四月二十二日）第六月二日於東京府外國官高位大隈四位樣ゐ英國商

人オールト奉申上候

洋暦千八百六拾九年第一月日本政府ト英國商人オールト商社ト條約取結候金銀塊銅御注文之義ニ付於大坂度々閣下ゟ御懸合奉申上且閣下東京府ゟ御乘舟之後五代様ゟも數度御懸合奉申上候金銀塊先達而横濱ゟ代價四拾五萬トル分廻着仕候ニ付何卒早々御請取代價御下ケ渡被成下度奉存候左様無御座及延引候而ハ利足其外諸雜費も相懸り可申義ニ付早々御引替被成下度尚及延引候而ハ於私も甚迷惑仕候間前段宜敷奉願上候此段御報被下置度御願奉申上候頓首謹言

四七　中井弘書翰「大隈重信宛」明治二年四月二十五日

今朝御相談仕置候舊藩兵隊松前城を恢復いたし此後之形勢甚切迫之次第ニ而不取敢彼地ゟ申越候彈藥（シナイドル小銃の彈藥）拾五萬發急速買求め差送り候趣の危窮ニ付而ハ右買入方當今費弊多端之折ゟら何分舊邸ニ而取計方無覺束就而ハ軍務官ゟ御相談被下匆々右彈藥買入金御下渡被下度伏而奉願候尚公用人附屬之者さし出候間細事御聞取被下度此段如此御坐候以上

四月廿五日　　中井弘藏

大隈四位殿

至急要用

四八　馬渡俊邁等書翰「大隈重信等宛」明治二年四月二十五日

只今英商ヲールト用向有之外國官へ罷出用談之次申聞候ニも本日横濱英國軍艦箱館ゟ歸著右ゟ公使へ申越候ニハ箱館ゟ西之方へ（則先日承候ヱサシに可有之）官軍上陸終ニ松前城を攻落し（此落城之事慥に申聞候ヲールト申聞）追々箱館へ進擊候様子箱館ニ而も外國人三拾六人程有之過半外國船へ乘組相避候由ニ候得共拾八人程ハ未ゟ陸地ニ留り居候由右軍艦出帆後必ス海陸進擊之頃ニ可有之との由日限も何日ニ候や不相心得由右之通申聞候間此段不取敢申上置候ヲールトハ

公使宅へ罷越承り候由ニ御座候以上

四月廿五日第三時過

外國官ニゟ
馬渡八郎
宮本小一郎

伊達中納言殿
東久世中將殿
大隈四位殿

四九　寺島宗則書翰「大隈重信宛」明治二年四月二十五日

昨日歸港之時英公使ゟ差越候處
一貨幣之事一日も速ニ御決相成り度事
一東京横濱之間鐵道ヲ日本商人ゟ爲作候事
一中山牧助を佐渡ニガワ同伴被差遣度事
右之趣申聞候間前二條ハ兼ゟ御承知之事縷々不要申述後一ヶ條ハ急務ニも無之尚近日御相談可致候幸便申上置候已上

四月廿五日　寺島陶藏

大隈四位様

五〇　岩倉具視書翰「大隈重信宛」明治二年四月二十八日

前略
楮幣布告一件追々議論之義有之退出後頗苦心候何卒明朝迄御發表御見合可給候只々京坂飛脚之所何卒々々御見合もし飛出候ハヽ早々追使御出し可給候此上誤り候ゟハ大變ノ義と申事ニ候間何ゟ御し明朝迄是非々々御見合可給候也

四　廿八

追申吳々大坂京都飛脚之所深く御賢考頼存候もし飛脚出候ハヽ必別段

追使御出し可給候也

大隈殿　　對

早々

【備考】四月廿九日金札相場を廢し正金と同一に通用せしむることを令す
二十八日大久保利通書翰參照

五一　辨事書翰「大隈重信宛」明治二年四月二十八日

辨事

楮幣布告之事件議論有之候ニ付京坂飛脚差立見合之旨敬承候酉半過ニ出
し候故最早五里程參り居候と存候間跡追よて六ケ敷と存候へども極々至
急よて差留候樣可申達候仍御請如此候也

大隈八太郎殿

【參考】大久保利通書翰「岩倉具視宛」明治二年四月二十八日

今朝ゟ御書被成下奉謹讀候中島（鎌風）ヨリ巨細事情承知仕實以驚駭仕候兎
角此上之處
御英斷被爲在候外無御坐幸ニ
御決心之旨拜承仕誠欣躍仕候乍不及小臣等も實ニ一死ヲ投粉骨碎身
可仕候兩日も仕候ハヽ平癒可仕候付直樣參殿御趣意可奉伺候然處只
今鳥渡承候得ゟ金札一條ニ付正金同樣通用可致御布告被爲在爾後打
を取さる者罰を與ルトノ議有之今日よも議事有之候由承申候實ニ此
御布告御一大事ニゐ篤与御熟考不被爲在候ゐゟ大事去り可申候ト心
痛仕候抑金札而已あらゞ斯迄政府信義ヲ被爲失候ゐ殆瓦解ニ至らん
とする折柄今形よて右樣ニ令降下相成候ハヽ不被行ハ顯然ニ有之左
候得ハ數萬之罪人を御拵可相成若罰スルヿ能ハサレハ最早夫限之事
ト奉存候尤商民之人心ニ背キ候而已あらゞ諸藩人望迄も彌離叛不可
救之地ニ陷り可申候此一條ニ付ゐゟ誰之說よしても小臣よおひてハ

萬々不同意至極ニ御座候間たとひ令せらるゝよしても深重御熟考被遊下候樣萬禱仕候畢竟今日金札上ニしても政府之御威權不相立より此よ及候義之處更ニ反省する處あく罪を犯したる者よ見あし嚴令ヲ下さゞ候ハ暴よ屬し決あ寛大至仁王者之政与ハ難申奉存餘不堪杞憂此段乍草卒言上仕候多罪々々

四月廿八日　大久保一藏

岩倉公閣下

五二　田中廉太郎書翰「大隈重信宛」明治二年五月一日

大木内啓公ゟ被仰候儀も有之參謁之上申上度趣も縷々有之候得共昨今罷出兼候ニ付急務一事左ニ言上仕候

金札相場六十匁ニ御定打金取候ゝの夫々御罰法御布告可相成風聞仄聞仕候もし右之趣被仰出候へハ只今迄四五十兩之品も百兩ニ直上ゞ ゞ ゞし四五百兩之物も千兩迄沸騰可仕も必然ニあ右相場之折合不申内細民無量之困苦を受加之融通之道塞り大不都合を生し可申其譯も從來金を銀ニ替錢を銀ニ換るさへ夫々打金有之候處札と金との間ニ打金御停止相成候あも正金も世上ニ不顯樣成行隨あ融通止り商賣休業之變差起り可申追々新貨幣ニ御引替之道相立候得も金札之被行方何程も他ニよき御工夫可有之一旦十三ケ年限と被仰出又百貳拾兩ニ付百兩（即五十匁之相場にあたる）と御布告之上萬一此際ニあ夫をも御動し相成候あも今日之令あしゑニ替る樣萬民疑惑を生し可申

三思一言九思一行

右等之古語も有之候間篤と御熟考之上御布告被遊候樣仕度不在其位不議其政と愚衷建言恐縮至極候得共萬一御參考被成下置候ハヽ難有仕合奉存候多罪恐惶謹言頓首

五月朔　田中廉太郎

五三　會計官書記書翰「大隈重信宛」明治二年五月九日

靜寛院宮御方以
思召京都御住居ニ被仰出候尤德川家ゟ御緣組被爲在候義も不被爲解以後
御賄向之處も　朝廷ゟ被爲進一ケ年總計凡五百石に七千兩程總て　桂宮御同樣御
積定此義先以て會計官へ御內談も可有之筈ナカラ昨年來種々入込候義も
有之候御次第ニゟ猶委細義ハ御面談被成候段岩倉卿（權大納言具視）より御口達有之候尤
御退散後ニ付此段申上候樣私共ゟ被仰聞候仍此段申上候以上

五月九日　會計官書記

參與大隈公閣下ゟ

五四　辨事書翰「大隈重信宛」明治二年五月十三日

御用之儀候間明十四日朝八字參　朝可有之候也

但正服着用之事

五月十三日　辨事

大隈四位殿

五五　楠田英世書翰「大隈重信等宛」明治二年五月十五日

一筆致啓上候漸暑相成可被成御凌珍重不斜奉賀上候扨ハ西京ニゟ御別仕
候より絕ゟ不能御音信御疎情之至罷過候當三月初杉本御連名ニゟ僕當地
着之御知らせ宿元狀相副旁當近在騷擾之始末荒增申上候ハ定ゟ御承知可
被下誠ニ僻遠絕地ニゟハ何も京畿之風評も不承只々日誌ニゟ致想像候
位ゟ外無之御着輦ニ付四月中旬迄府縣登京之御達ハ有之候得ニ人少と申
外國方打混出拔出來不申實ニ殘情不少候
一御舍弟君當縣下御通行被成靑森邊連地之出兵爲取ゟ旁箱館之樣子も爲
御見繕御出候由

一夕御出相成依りゐ漸御國之樣子副島江藤新平歸國之事も荒增承知いさし候
一當縣ニも先達ゐ施藥院學校外國交易ニ付商舍抔相建田舍ニハ存外舍
中抔寄金有之現今三萬金よニも可及漸く折合候得ハ意外之賣買繁昌可
仕と被存候來ル十八日より芝居抔興行いさし只々困入候事ハ金札ニゐ
迚も嚴達いさし候ゐも現在之處實ニ運用相附不申所見二三之弊害ハ何
と存候ゐも不行事有之是ハ御推察中之事と存候詰り物價益高直會計官
計入爲出入處之物ハ定名ゐり出處ハ應物價候得ハ大ニ損カ相立百官月
給之額ハ別筋ニ候金札之弊害今日を極め申候僻遠之地兩京抔とハ實地
大ニ違ひ有之中々時相場抔申聞候得ハ初よりうるさく存候府縣行政官
實意を體し何程盡力いさし候迚も永久行を不申强ゐ行候ゐも時勢壹兩
之物品ハ壹部ニ相成去ハ四十枚之壹兩札ハ拾枚ニ相減申候初發行之深
意ハ餘程面白追日直うな宜敷筈候得ヒ今日之格合ニゐハ裏ハらニ移行
無詮方次第此上ハ新敷銀金鑄造相成先遠在之方府藩縣より御遣し相成
少分ニゐも引替被仰付候ハヽ從今倍ノ金札之通用宜敷可相成右ハ御案
中之事と存候貴所樣ニも會計方ゐ御轉官之旨外國官より申來御苦勞奉
存候
一御舍弟君太田樣より貴所樣へ之御狀一封乍序僕宿元狀一相副御賴申上
候間宜敷樣奉願候
一南里與介登京相成居候哉同人末子芳郎達者ニゐ相替儀無之ゐまり方八
分談書ハ二分計隨分宜敷御ざ候御序御傳聲可被下候折節宿元狀同人へ
相談いたし度候條是又宜敷樣萬端御願仕候先ハ當縣之樣爲御知旁御見
舞迄如此御座候恐々

五月十五日　　十左衞門（新潟縣知事・植田英世）

大隈八太郎樣
坂部晉三郎樣

五六　外國官判事書翰「大隈重信宛」明治二年五月十七日

過日三條殿ニゟ楮幣一件ニ付英國公使と御談判相成候ゟ決議之上今十七日同館へ御出浮御報答有之候御契約ニ付ゟ者是非明日朝十字まてニ御評決之旨承知致度段同人申聞候趣今日シーボルトよりゟ申立候間則及御通達候將明日飛脚船當地出港ニも相成候間旁繁務ニ付前條之通十字迄ニ御出浮被成候ハヽ大幸之旨承候間此段御通聲ニおよひ候已上

五月十七日　　外國官判事

大隈四位殿

五七　田中廉太郎書翰「大隈重信宛」明治二年五月二十一日

はゝゟ拜謁も不仕候へ共益御勇健被遊御勤奉恐賀候隨ゟ私儀も東京之事務大木君（後任、東京府知事）ゟ罷出無忌憚建言可仕趣等木戸準一郎公ゟ御狀被贈遣候ニ付大木公ゟも屢拜謁建言等仕候處會計ニ屬し候趣も尊君樣ゟ申上可然趣御噂ゟ付先頃兩度罷出候處御不在ゟ付不顧失敬一書捧置（楮幣愚論）之引取候後參殿不仕然ル處爲國家大緊要之事件有之最厭他聞候儀ニ付極内入尊聽申度右一大事件之外下之はゟゟみニ不相成して上之御益ニ可相成税法も數條有之右等煩御内聽申度參上仕候暫時間御逢被下候樣奉願候恐惶謹言

五月廿一日　　田中廉太郎

口上

伏請御親展

緊要事件

【參考】　大久保利通覺書「岩倉具視宛」明治二年五月

一阿州土州備前三藩金札通用不致是迄　朝廷樞要ニ列し如此よてゟ御趣意天下ニ貫徹いゟし候道理無之篤ゟ御忠告可被爲在事

一贋金一條斷然嚴禁御布告早速御糺彈有之證跡有之候者無忌憚御處置可有之

但大隈議論之通惡金ハ切捨第一京攝東京商買之手を除ク御探索惡金取扱候者ハ何方之者タリ共召捕拷問ニ可及此段知府事屹与御達之事

一京都御取締之事監察方より御手ハ下り居候事与奉存候乍去尚留主監察方ゟ御沙汰有之事

一僧都之混雜ハ等閑被捨置候事ニハ有之間舗仍而排佛之御趣意ニ無之趣ハ速ニ御布告可然

一府縣役員役名月給平均等之事民部官ニ而取調居候尚又御沙汰相成可然

一五等官以下以上月給增減之事會計ゟ取調被仰付可然判府事辨事苦勞之差別ハ尤可有之

一府縣ハ治國之根本ニ候趣頗感伏兼而持論スル處ニ候民部官ゟ御委任ニハ候得共一切ノ基則且人撰等ハ厚ク實地ニ處置ナクンハ大事与奉存候

一佛脫人生擒之事大村ゟ御談之事

但此始末更ニ承不申候何之軍務官引受之筈候得共外國官ニテ斷然應接可有之ニ付公法ヲ以曲直分明之御處置被成度事

五八　大村益次郎書翰「大隈重信宛」明治二年六月七日

於函館外國人ヨリ買入之石炭代金追々拂方入用候間差向正金壹萬兩御廻可被下候尤此内四千兩丈ケハ壹歩銀約定申來候旁御承知其御運可被成候此段及御掛合候也

六月七日　　大村益次郎

大隈四位殿

五九　大村益次郎書翰「大隈重信宛」明治二年六月七日

蝦夷地開拓ニ付會津人家作農具料等金札を以御渡方相成候處於彼地ニ未タ金札難被行趣相聞候當度之義ハ是非正金ニ御振替被下度候此段及御掛合候御答相待候也

六月七日　　大村益次郎

大隈四位殿

右之通及御掛合置候正金御渡可被下候也

六月九日　　軍務官判事

會計官判事

至急

六〇　中井弘書翰「町田久成等宛」明治二年六月十一日

寺島（宗則）議官ハ伊藤（博文）出港ナラバ其跡御引續御調之義外ニ御見立被下候ハヾ森新十郎の出官如何

英佛ノ兵隊ハ當裁判（横浜）所ノ角本町四丁目ニ屯集巡邏セシ處當港取締行屆さる廉を以昨夕山手之陣屋ニ引取レリ右ニ付東京及び六郷川向品川縣支配所途中市在共ニ此末取締向格別嚴重無之候ゆゑ再度兵隊繰込可申之案中ニゆ若此儘ニゆ不取締不行屆と申は各國ニ對し申譯面皮も無之我國土ヲシテ他人ゟ取締ラレ候儀之に過さる汚辱之有之間敷就ゆゑ目前之無禮不法を以此重大　國體ニ係ルノ大事件ヲ惹出し候は實不忍儀ニ付夫々御申達有之度得貴意候也

東京開市之大都惣體之市中ニゆ貿易通商いたし候儀ニゆ近今之處ハ別ゆ混雜いたし市中其外諸藩兵隊多人數入込懸念ニ被存候付ゆゑ江戸灣も莫大ノ里數取締可行屆歟愚按いたし候ニ東京開市ハ大事を曳出スノ媒酌と被存申候就ゆゑ可相成ハ右ニ御注意相成開市場ハ御見込も無之候ハヽ當

官ニ請取方いたし候歟又ハ會計官通商司ニ引渡相成候歟右ニ而平穩ナルベク奉存候尤築地關門内ハ居住地のミニ而貿易通商ハ日本橋淺草本町邊ニも自在ニ横行シ可申ハ勿論ハ事ニ候間何分不都合到來ハ節無致方次第も事實可有之ニ付可相成盛ナラザル樣相成度存候事尤取締御請合相立候ハヽ何も右樣ハ儀も申迄も無之候得共其邊東京府判事御談判相成度存候事

一外國官是迄尤正月以來ハ引繼細事ハ大隈四位篤与了解實地ハ運用取扱被致事ニ付諸事無手拔御引繼相成度尤澤知官事（宣嘉、外國官知事）公ハ尚又昨今ハ事ニ付大隈氏ハ委細御引繼相成候方可然哉ト奉存候勿論宇知官事（伊達宗城）公も諸事御了解も有之事候得共深念遠慮を以右ハ段申上置候也

一公議所日誌太政官日誌官員錄其外新聞紙等御買入御廻し相成度此比ハ朝夕ハ御變改ニ而衆人疑惑無之樣尤外國人の方前ニ變改ヲ知る事ニ而政府役人ハ却而不案内と申甚子供ハ如キ振舞故時々御手數ニも候得共太政官ニ御出勤ハ序夫々御取配相成度政府の官員ノ姓名職掌何人ナルヤヲ知らズと申儀ハ外國ニ對シ難申述依之此段申進候也

右用事迄如此御座候以上

六月十一日　　中井弘藏

町田五位殿
馬渡八郎殿
宮本小一郎殿

此書面大隈氏ニも御廻し被下度奉願候

六一　辨事書翰「萬里小路博房宛」明治二年六月十二日

御下問之儀有之候間明廿三日辰ノ剋直垂着用參　朝可有之候也

六月十二日　　辨事

會計官

知事御中

追ゝ所勞之節も副知事（大隈重信）參朝之事

六二　井上馨書翰

「大隈重信宛」　明治二年六月二十一日

只今參朝仕候處藩之石高割家祿之義二十分之一よりハ實以難澁由よりて輔相公（三條）亞相（岩倉具視）等今一應御相談仕見呉候樣との事よ御坐候二十分の二と相成候ゝハ如何哉との事冠婚葬祭等も家祿之内ゟ致し候事故甚困窮之由よ候愚說二十分之二と相定り候ても一端（旦）君臣之分際漸々破レ候時ハ再度現シ候とも如何樣よも相成可申候否御答奉仰候且亦今日ハ至て靜よて民政局ゟ廣澤（眞臣）軍務ゟ大村（益次郎）も出勤仕居候事是非とも御出勤被成下候て諸事相運ひ候方可然奉存候間御苦勞奉祈候若シ御不參候ハヽ山口、伊藤之間よても出伺候樣御取計ひ奉願候爲右草々拜白

六月廿一日　井上聞多

大隈四位樣　至急

六三　楠田英世書翰

「大隈重信等宛」　明治二年七月五日

拜啓先達ゝハ態々尊書被成下御禮申上候愈御堅勝御奉職可被成珍重奉賀上候偖御地當年ハ如何氣候ヒニ御座候哉越地ハ思之外暑氣强蚊なと誠ニ夥敷朝夕ハ相冷候得ヒ晝間ハ格別國元ニ比較いたし候ゝ不相替幸降雨出水も無之豐作之由下方欣喜安心いたし候當國ハ山國と存居候處左ニ無之東北ハ疊山相繞西南廣原沃野四方二三十里之處全水稻之地ニ御座候一先便副島ゟ相當越地之荒增愚存申陳置廟堂決定之程否知らせ呉候樣相談いたし置候

一紙ハ當縣出張外國官三澤癸一郎よて同人心得之爲メ遣し置願意之筋大金無之ゝ不叶ニ付是非々々貴所樣方へ致御面會精々申陳呉候樣申遣置候條乍御面倒右書ハ同人より歟副島君ゟ御取寄御覽被成下諸先生御

評決之程偏ニ所希御座候

一愚存ハ當港（新潟）作灣中之事

附蝦夷開拓ハ當港必根據ゟるへき事

一越後を割ゐ二ケ國とし蒲原ノ國を置之事

附佐渡縣を廢し越後へ屬すへき事

一蝦夷府をヱトローフニ可開之事

附船路を啓第一之事

尙本書ニゐ御覽可被下候ゝ

一當地居留之英岡士抔申候ハ日本北海蝦夷以北船路ハ最早相啓ゐし由去秋初比歟井上石見英船乘込ヱトローフへ可參と海上ニゐ沈沒右ハ餘り海岸を乘りし故事を誤りゟり然し舟中之人々命ハ皆々助り無異議と申聞候此上ハ廟堂御治定次第也

一會計餘程御心配之由實ニ此兩三年之處極々可爲大事候

一若失所置候得ハ何迄も夷人之下すみゟらん出納とも國脉之盛衰ニ致關係至急之事件最何事ニゐ候哉蝦夷開拓ハ二三四之次第ニ成行候哉第一着かる歟千萬無心元樣存候也

一金札相場ニゐ春以來頑固之越地誠ニ以相困り申候處値相當之通用御取計相成先ハ安心いゐし候此頃に至り亦又物價沸騰當縣二十金以下月給之人難立行最早其期相見申候癸丑之年亞ノヘルリ江戸へ參候刻過當ニ申候ハ見よ日本人十年を不出ノ擧國皆々ッホーゟらん又支那ハアヘンニゐ斃れ日本ハ金銀ニゐ斃可申と申候由右ハ諸先生固より御案中之事候嘸々御心配可被成日夜奉遙察候此段時候御見舞旁如此御座候以上

初秋五日　　英（新潟縣知事）世

團（島義勇）右衞門樣

八太郎樣

六四　井上馨書翰「大隈重信等宛」明治二年七月七日

別後各位御精勤奉賀候過ル四日六字神戸着直ニ上坂仕候早速造幣局ニも出勤井田(譲)盡力ヨて大分功も顯レウヲートルスも餘程勉強多分十一月下旬ヨハ銅錢細工始メられ可申との事ヨて御同喜仕候昨六日ロブスン局ニ參り彼も喜悦罷在候近來職方も餘程功者ヨ相成成功も日々相顯レ申候

一銀錢ニ目方幷銅錢等ロブスン考へと書物御渡シニ分相違候故新ニロブスン、ウヲートル抔相談ニ上別帋ニ目方且減シ方ト相成申候ケ樣ニ不相成候ゐハ我政府ニ損失多ク且我銀銅錢共外出可仕候故定て早速ロブスンヨリ先生方ニ申上候樣申事ニ候間御聞取可被下候

一金銀錢ニ形ハ英國ニ御注文ニ方可然との事ニ候銅錢ニ分ヲートルス受合候都合ニ相成申候

一銅錢目方幷減方等御違存有之候ハヽ早々御申越し可被下候

一模樣ハ隨分大ク御書を被成候てよ弘しく由弟相考へ候ニ御地ニ畫工當地より工ミヨ可有之と奉存候爰元も京都を書を可申候御地ヨても御書を可被下候爰元ニ分ハ出來次第差出可申候

一鑛山合局と相成候ハヽ當地ゟ手を下し候分ハ生野と大和且佐渡丈引受候て都合よ弘しく候間佐渡ニハ御地ゟ御投書被下候て當地ニ萬端伺出且掘出しニ分も爰元ニ直ニ相廻し候樣御沙汰被成下候ハヽ萬々便利且都合餘程よ弘しく候其他ハ御地ゟ御差引被成下候て當地運送御便利御付被下候樣奉祈候此段早々御答可被下候事

一バンク造作事件英コンシュルノ樣ニいをし度候由早速相運候樣可仕候

一ミント取締役並助役分拆人等參り候ハヽ是又家造り不仕ゐハ不相成事と奉存候

一バンクト條約書ノ寫一通り久世治作歸り便送り方可被下候

一此他ニ事情且急速御運ひ被下度廉々ハ山口(尚芳)ゟ可申上候間乍御面倒御願申上候近情後便必御洩シ可被下候　草々敬白

七月七日第十字

二白伊藤先生ゟ内歎願有之候其趣ハ濱婦事御承知通りべらぼうもだ故跡を追ふ事あらん歟と懸念候間若し右様の事件有之候ハヽ必々御制し置屹度奉懇願候若し尻押し抔被成候と必縫女をその様取計候間必々御願申上置候以上

大隈四位様　井上聞多

伊藤俊介様

六五　井上馨等書翰「大隈重信等宛」明治二年七月七日

以手紙致啓上候東京發途之砌大隈及伊藤氏よゟ被御申聞置候銅錢此節ニユーヨルク便ゟ別紙送り狀幷明細書之通り差越着船之上ハ御改メ御受取可被成候此段可得御意如斯御座候以上

七月七日　井上聞多

大隈八太郎殿

伊藤俊助殿　山口範藏

六六　井上馨等書翰「大隈重信等宛」明治二年七月七日

大坂着懸諸物價取り調候處惣ゟ東京より高直就中米價非常之相場ニゟ府内外之諸民困窮此時ニハ種々救助之謀略熟察いゟし候得共絶ゟ無御坐府内米穀入港之高ヲ問ゟハ相應ニ入り込ミ居候由然ルヨ米價引キ下ケ不申所以ハ當春已來金札相場御廢止已前米價百五拾兩内外之聲ヨ因習いゟし勿論只今ニゟハ却ゟ金札相好候勢ニ相成居候得共雨天打續彼是与申諸藩ハ藩邸ニ貯ゟ商人ハ商人ニ貯ゟ賣り出不申且金札正金同様被仰出候爾來東京相場与相違ヒ候處より府ゟ暴威ヲ以テサヘ相場ヨ相成人民益疑惑ヲ生シ米穀有無之多少ヨ不係賣捌方差控是又愚民ノ人情不得止勢如何トモ難成良策更無之困窮之場合ニ候右之次第ニ付相場も天然ニ任せ候外無之

然レ𪜈當時府ゟ極メ相場加賀米八拾五兩其外段々有之即時自然ゑ相場よ
被差免候得ハ忽チ沸騰愈カ上難澁可致旁前後勘辨いゑし候處先ツ支那米
買込貯ゑ置然ル上右ゑ相場差免候外有之間敷与奉存候然ルトキハ譬ゑ何程
上登いゑし候与も差支ゑ無之且又上レハ下ルノ利諸藩商人も米穀無何与
相貯候ゑも無益自然ニ當然ゑ相場よ立チ到り候義ハ必然ゑ理ニ候右ニ付
委曲ハ武富ニ申含メ同人ヲ差越候ニ付委敷御聞取り被下早々支那米買入
ゑ手都合御厚配被下度奉希望候代金ゑ儀段々諸藩ゟ相納候金子有之候付
右ヲ差越ス積ニ御坐候得共何分差懸り間ニ合不申候付跡便ゟ早々仕向ケ
可申一先三井ゑ御預ケゑ拾五萬ゑ内ゟ貳參萬兩御繰り替ゑ被下度御相談
申上候

○諸藩ゟ納りゑ金子差越スト申しゑハ御疑も可有御座候得共當府ゑ儀ハ
別紙ニも申上候通り何分市中ゟ三百萬兩与申ゑハ調達方整不申兼ゑ御談
申上置候通り元商法會所ゑ金札差出候外無之右ゑ金札替りゑ正金差越積

228080

ニ御坐候何卒當府形勢御洞察被下武富与も御談ゑ上可然御取計幾重ニも
御盡力奉禱候先ハ此段急取紛荒辻如斯御坐候以上

七月七日當賀　　井上聞多
大隈四位殿　　山口範藏
伊藤俊助殿

六七　三條實美書翰「大隈重信宛」明治二年七月九日

要用以略楮申述候然者明日各國公使ヨリ楮幣ゑ儀談判有之候ニ付ゑも外
國官計ニゑも委曲ゑ次第應答も行屆不申儀ニ付大藏省足下ニも苦勞乍是
非同席外務一同談判有之候樣致度候右楮幣ゑ一條段々是迄ゑ手續も有之
足下始盡力ニて追々相運候處至今日齟齬速順序相立不申ゑも對各國信義
ヲ失シ内外不容易ゑ艱難ニ候得も猶政府變換無之筈元より其官ニ委任ゑ
事ニ候間猶此上見込ゑ通盡力有之度偏相頼申候明日各國ヨリ催促ニ及ひ

又々不都合有之候てハ實ニ政府の失體而已ならず此上迫切之場ニ至り甚
當惑至極心痛候間重疊御苦勞氣毒存候得共明日之處出張談判有之候樣吳
々祈望致候尙面上可申陳候得共至急之儀ニ付匆々以寸楮相達候仍要務迄
閣筆候不罄

七月九日　　實　美

大隈大輔殿

【參考】　大久保利通書翰「岩倉具視宛」　明治二年七月十日

奉拜啓候益御機嫌克被遊御奉務奉大賀候　然ハ昨夜ハ大隈ゟ示談仕
候處今日外國談判ハ御受仕候右大臣殿ゟ申上候間御聞取被遊候筈与
奉存候乍去大藏省にて奉命之義中々前途目的相立兼候義ゟて實奉對
朝廷恐縮之至ニ候得共即今會計ハ
皇國之浮沈ニ相拘候一大事ニゟ其大事ヲ目的ゟしニ御受仕候義決ゟ
難相叶次第ニ候間不得止辭職仕候外無之与決心之趣承申候小臣全ク
一分を以存慮丈ハ十分吐露仕種々及懇談候處然らハ今一應熟考之上
今晩明朝之間小臣迄決答ニ可及段承申候成否如何ヲ不知候得共誠ニ
治亂之此ニ在ル譯ニ候間一分ヲ以精々盡力可致試候就ゟて廟堂にお
ひてハ寸歩も御動搖無之樣今更御確定之政體ヲ動かさゞ候てハ天下
之笑ヲ招キ候義ハ無申迄何事も御信義ハ立不申樣ニ成候ハヽ夫迄与
相考候間益御踏〆相成居何樣之議論相立候共屹然御不動之處吳々奉
祈候此段爲念奉申上候間右大臣殿ゟ厚御示談被爲在度奉拜願候

七月十日　　大久保一藏

岩倉公閣下

【備考】　大久保利通日記七月九日の條に「一、明日外國談判之義に付退出ゟ大隈子ゟ訪種々及說得御受相成候」とあり

六八　井上馨等書翰「大隈重信等宛」　明治二年七月十一日

過日ニウヨルク船便より一書呈置候間定ゑ御披見且ロブスン（造幣局雇外國技師）なも御聞取
と奉存候其節ゑ廉々御答奉待候
一地金銀銅現在高通貨ゑして
貳拾貳萬貳千九百八拾七兩
右元貨幣局有之分
一灰吹銀四拾六貫九百六拾目
外ニ
良平と歟此者東京爲糺問御引付のよし申町人引負有之候故取揚物共
通貨貳拾五六萬兩餘
一銅三百四拾五萬三千七百餘
右鑛山局ゑ有之分
内
百萬餘ホートヱン入質ゑ相成居候分

但ホートヱン取引一件も如何御見込被成候哉御地ゑおゐて御所置可
被成下候
一米價騰貴實ゑ困り入申候故過日竹富（武）差出候次第ニ御坐候
九州邊不作且松浦郡抔洪水七八軒も流失三拾軒計押潰し候由此順ゑて
も先半作と見込ミ候てゑ弘しく左候得も北越も昨年戰爭旁不順無之ゑ
も米も少ク候半と奉考候況不順故實冬なる麥作取附候米價等沸騰餘り强
ク候ゑも實ニ下方難澁立至り可申候間何とき當時の直段ゑて唐米ゑて
も取組置候ゑハ如何候哉此事件も竹富被召寄御一策有之度奉存候後便
否御答可被下候
一何分會計ゐ民政合し不申ゑも實ゑ込り申候且亦當地治河抔ハ定て民政
なる致し候事と相見へ何致居候やら多人數ゑ人足を集め夫々治河相調候
得もゑ弘しく候得共所作振抔ハ不得其意事ニ候別ニ當地も治河とて役
所等不立候ても當府なる致し候歟又ハ會計なゑても致し候方手順ゑて入

費も少しよて相濟候事歟と奉存候

一箱館附屬佐原志賀之助京師會計官より貳拾萬兩借下又當府商法會所より六萬兩貸渡し有之内壹萬兩餘納候計り甚以不都合之次第のみ候間同人御糺明被成下候て右始末御申越可被下候

一御地ニ有之候古金銀其外地かねよ相成候分御取調被成下久世治作歸り候便被仰聞候樣奉賴候同人者御用濟次第夫々歸府ゐたし候樣御下命可被下候

一南部其外鑛山ゐ手ヲ御下シ御急キ不被下候ゑハ十日計り機械運轉候と最早地かねもかし懸念不堪候之

一米直段　上米　當地凡表通九十三兩

一錢相場　内々取引百七八兩

一きゐを　夫々直段

一石炭唐大豆等　右夫々直段御書廻し可被下候

一通商司より飛脚定日御一決被成下候て御遣し可被下候

當日も今日六人之兩替屋共伏水まて着仕候間追々手を下し候積りよ候とふか人氣も會社抔大分下ニも論し候者有之至ゑ都合よ敎しく此機を不失樣心力を盡し候覺悟ニ候何分兩替屋と商社ハ差急置候て大融通を付後來屹度一所作不仕候ゑも前途目的も更よ立不申候此將來を樂しみよ致居申候間政府之模樣御洩し可被下候事敗レて去等之事ハ最早成丈御堪忍後日之事業よ御讓り被成候樣申も疎ニ候併不得止場合も候ハヽ屹度檄文御飛し奉待候御捨置被下間敷候

一諸侯商會抔も今以止メ不申候坂府ゐ抔ハ未タ御沙汰も無之候間早々心得迄御達し有之候樣御取計ひ可被下候

一堺縣河内縣合併御運ひ可被下候

一金札受取方ヒ追々仕候得共正金未タ拾二萬兩計り集り候のみニ候内ヨ
長州抔今以強情金札受取方も不致疲弊を名トシ迚も出來ヌ抔申立候間
今一應嚴重於御地内々ヨても岩公ゟ主人ゟ御申付之方可然奉存候
一小倉石州も最早始末相付候てよ泛しく相考へ申候少々ヒ押付不申候ゆ
ヒ迚も六ツケ敷候内小倉ハ長崎ゟ合縣と相成候方都合よ泛しく候
一山尾野郁（柔介）又々御催促有之度奉存候
右之廉々御運方奉願候其内時下兼々御自愛專一奉存候　謹言

七月十一日

山口範藏
井上聞多

大隈四位様
伊藤俊助様

六九　三條實美等書翰「大隈重信等宛」　明治二年七月十六日

貨幣談判事件内外億兆ニ關係實ニ不容易大事段々御評議も有之候得共ツ
マリ大藏外務之兩省殊更ニ御熟話十分御盡力有之度存候尤餘日も無之ニ
付今日中御決議明十七日十字兩省御參可給候此段申入候條吳々御配慮懇
願候早々以上

七月十六日

實美
具視

大隈（大藏大輔）殿
寺嶋（外務大輔）殿

追申民部省も關係不少義ニ付廣澤ニも今日申剋比大藏省ゟ出頭之樣
申通し置候也

大藏省迄ハ御苦勞ニ付大隈宅ゟ申剋御集會可被下候樣廣澤（眞臣）（民部大輔）ゟも申
通置候左樣御承知可被下候

七〇　廣澤眞臣書翰「大隈重信宛」明治二年七月十七日

彌御清安奉抃賀候兎角御所勞如何被爲在候哉爲國家疾御全快奉萬禱候陳
ゟ過日贋金ゟ事件議事ゟ節少々愚存言上仕置候處ニゟ實以不容易事態ニ
有之詰ゟ大藏外務兩省ゟ關係專務ニ付昨夕寺嶋（宗則、外務大輔）事尊寓ゟ罷出得と致示談
候樣申越候間拙生ニも其節御末席ゟ罷出候樣との條岩兩卿ゟ御沙汰ゟ趣
有之候處折柄外出中ニゟ夜中歸寓ゟ為し承知仕候事故終ニ參上不仕段宜
敷御涵容可給候愚存ゟ所ゟ伊藤（民部少輔）俊輔ゟも相咄置素より不足取事ニ候得共
御都合次第同人ゟ御聞取奉願度其他格別申上度趣も無之實ニ内外人民ゟ
對し無申譯次第と浩歎ゟる而耳何分御好策奉仰候且又過日於　御所差上
置候諸縣官員規則御氣附筋御添削ニゟ御返却可被下官員減少ゟ右も一統
見合居候事ニゟ至急御布令有之度奉存候右御斷旁匆略如此御座候頓首拜

七月十七日　廣澤眞臣

大隈樣　拜呈

七一　澤宣嘉書翰「大隈重信宛」明治二年七月十八日

先刻寺島參上ニゟ貨幣一條定ゟ御談決ニ相成候事と存候何分明日と相迫
り候義ニ付心痛此事ニ候サレドモ小生輩只々心のミ齷齪仕候計ニゟ更ニ
好分別も出りゟ候只管兩君御談決と政府ゟ確定トニ有之而已ニ候加之岩
倉頃日來所勞ゟ由ニゟ明日ゟ不能出會ゟ間傍以苦心千萬御憐察可被下候
吳々今晩中相決し不申ゟは不相成候間御談しの都合ニよゟ三條ニゟも岩
倉ニゟも唯今よゟ御同道申候ゟ是非決論致度と折角存込候ニ付御模樣御
尋申候尤參上可相伺候得共先以書中御尋申候仍早々如此候也

七月十八日夜　外務卿

大藏大輔殿

至急御用

【備考】大久保日記七月十九日の條に「一、十九日依召條公ゟ參殿今朝外務大藏

刑部民部參議彈正等集會尙惡幣之一條評議有之內地惡幣通用差留外國惡幣引替之義ニ決す今十一字ゟ外國公使談判有之」とあり

七二　寺島宗則書翰「伊藤博文宛」明治二年七月十八日

贋金取引之事横濱ハ勿論ナレ𪜈東京ヨリ港ニテ輸出之道路ヲ相斷申度三四日之中東京出船之場所不殘穩密ヲ以取締いたし陸路ノ方ハ勿論東京府より嚴令行屆候樣早々御達有之度且品川縣ハ勿論其他之縣ゟも同斷取締之事別段御達可然右心付候儘申入置候也

七月十八日　寺島陶藏

伊藤俊介樣

公用副

七三　井上馨等書翰「大隈重信等宛」明治三年七月二十日

不順之天氣實ニ當秋之毛上も如何成果候哉と懸念此事ニ御坐候着後追々呈書も仕候共更御一報も無之御地廟堂之模樣も如何成行候哉此一事のみ夜白痛心罷在候過日中井（弘藏）より投書有之英王子來着ニ付暴客政府ゟ出譯と町田抔も辭表差出政府も反覆之所置のみと申來勿論今更愕然も致し不申候得共兩生等も於横濱別ニ臨ミ事成ハ忠臣不成奸賊と申上候心得ゟて日夜勉强罷在朝七字ゟ府ゟ出勤十二字迄夫ゟ中ノ島ゟ出勤造幣局も近來之勉勵と自ら相考へ候得共根元之所如何相成居候哉更ニ御報無之暗夜步行之姿とふ歟兩先生も敢ゑ御出勤無之由何分前途之御見込從驥尾度候間何卒御憐を以御見捨不被下ゑもよゑしくかと奉存候追々申出置候件々も御運ひ被成下候哉又も御打捨置被成候哉更ニ不相分殆進退維谷と云やうゟ御坐候當府入費も一ヶ年三拾萬兩位も有之勿論斷然除ク之目的ゑ有之候得共根元之瓦解ニ候得も一部分之得健剛候ゑも只一身ゟ怨を受候迄事實ニ益無之候故未タ因循を搆へ居申候

一、木場（傳内）も意外之人柄且前途見込抔も更ニ無異論者よ候是迄少々改革論抔を立居候故小吏等不快なる色々雜言多く事を生し候事と奉存候此段ハ御安意可被下候必々御留置奉祈候ウエスト、サンなも好キ樣相見へ申候

一、東京與力同心勘定奉行配下抔之分本領安堵よて無仕のその有之候樣相考へ申候何レ當地之分も月給之外扶持方五人或ハ三人有之候間其邊ハ一般ニ三都府共ニ或も何人扶持何ケ年被下士籍ハ被脫と云樣一同相成候樣有之且御一決候ハヽ京都當地共ニ御布令急速奉仰候諸侯之金も貳拾萬位ハ出金有之候何も形勢一ツも不知實ニ込り入候間何分最早御一報位ハ急速被成下候樣奉祈候爲右如斯御坐候謹言

七月廿日

二白小松（清廉）も昨日着坂ニ相成面會仕候薩國論も中井抔申樣之俗論よも無之候西郷（隆盛）抔誠斷然御所置之無之ヲ暗痛之模樣ニ候

一、加州なる昨年每年十萬俵宛七年之間獻納之願よ相成候軍務官之取扱ひニ相成既よ東京於軍務官御受方相成候樣御沙汰有之候由左候得ゑ軍務官歳費も兼て一年之定格御仕渡之處右丈ハ御相談之上定費之内なる御減少シ有之候ゑも可然哉ニ奉存候此段聞込候儘申上置候尙亦制度終ニ御變換之模樣ゑ相伺候間如何相極り候哉御聞セ可被下候

四位樣　範藏
俊助樣　聞多

【參考】　木戸孝允書翰「伊藤博文宛」明治二年七月二十五日

亂筆高恕尙速ニ御投火是願候

今十字御認之朶雲相達拜見仕候引續御盡誠大賀此事ニ御座候さてハ爰元光景も粗得貴意候通別ニ相變り候事も無之過日來民部大藏一致之事も種々隱然手を盡し候得ども當り障り多く漸兩三日前ニ至り負

惜ミハ有之候得ども大隈氏ニ兩局相兼させ候位之處ニ片付乍然元來着眼上より之事ニ無之一時之策ニゟ實ニ不平之件々不少全體初發ニ大隈を參議ニ相論し候處否相論し候もの無之始終面從腹非之所致而已ニゟ隱ニ種々手を盡し一向弟等へハ毫も不相洩前原（一誠）等之事を相謀り誠ニ其間不可說盡之情實不少版籍論已來七八之建言毫モ御採用無而已ならず却ゟ暗ニ遠隔もるる之術等も有之且又私意歟公意歟不相辨候得ども大坂府兵庫等之此度之進退ニゟも一向合點ニ入不申如此次第ニゟハ實ニ將來　皇國之勢如何變轉可仕歟智者も識者も御奉公仕候目的ハ相立申間敷今日まで己之私を拋無內外樣ニとの微誠を以一毛之御奉公仕候も必竟水泡ニ屬し隨分不面白存申候溫泉之願も今日御許容廿八九日頃ニハ是非出立其上之模樣ニゟ脫然相去り可申何卒金川臺邊ニテ拜靑仕度大隈氏を態と其まで相招候も多事之折柄如何ニ可有之兄御出浮被下候得ハ尙御高諭も承知仕度と只々希望いたし申候其中臺邊ニゟ可然處御座候ハヽ御示し置可被下候先ハ爲其草々頓首拜復

七月廿五日夜

尙々一繩之力ニゟ中々維持ハ不思寄處逐々偏論而已ニテ相固め候ゟハ終ニ如何とも難致如御承知二州（防長）ニゟもら時としてハ一歩も難被進事不少候處烏合之　朝廷實ニ前途之目的更ニ難相立烏合之所以を破摧し大根軸を立不申ゟハ隨ゟ百事瓦解申迄も無之今日之形勢ニゟハ實ニ不如歸が第一策歟と奉存候筆頭ニ難盡奉存候以上

芳　梅　盟　兄　　御密披　　允

【備考】大隈重信七月二十二日民部大輔となり、尋て八月十一日大藏大輔兼任を命ぜらる

七四　山口尚芳等書翰「大隈重信等宛」明治二年七月二十五日

以飛札致啓上候陳ゝ生野鑛山之儀追々承知も有之候通時々奸民共徒黨を結ひ沸騰致し種々故障申立開拓之道を妨ケ候處先達而井田五藏（龍）出張引續而久美濱（伊豆野垣）縣知事も立越說諭等ニも及ひ候ニ付一旦ハ平穩之姿ニも相見へ候處尚又追々沸騰奸謀相企前途之妨而已を相計り更ニ心服之模樣無之此ノ向キニ而ハ鑛山開拓之儀迚も前途之目的無之眼前是迄御雇入ニ相成居候外國人へ對し候而も兩人共如何共可申解辭も無之不日鑛山幷造幣兩所之器械出來ニ相成候而も其金銀銅之出ル源を塞き候而ハ何を以空敷日を過し可申哉眞ニ忽ち困迫之次第痛辛此事ニ御坐候元來生野ハ久美濱縣管轄之土地ニ而同縣ゟ之所置寬猛其當を得候得ハ何ソ奸民共今日之如く朝廷之御趣意を違背蔑如するニ至り可申哉畢竟優柔不斷ゟ相生し候義と被察申候就而ハ兩人共へ同所人民生殺與奪之權御委任ニ相成候得ハ早速兩人之內同所へ罷越能々事情究明之上適宜之所置可仕無左而ハ往々造幣之見込無之候間右之次第行政官へ御伺之上可否早々御申越被下度候尤所置振之儀ハ別紙ニ相認申候條御一見奉賴候早々右得貴意度如此御坐候頓首

七月廿五日

山口大藏大丞
井上聞多
田中顯助

大隈大藏大輔殿
伊藤大藏少輔殿

再白生野沸騰巨魁之者共京師へ上り押（賀潔）小路家へ立入鑛山之事種々申立候趣右同家實ハ攘夷論家之由故ニ外國人御雇入等之事を相憎み奸民共之後楯と相成り申候故小前之者共惑亂ニ及ひ候勢ニ御座候以上

七五　木戸孝允書翰「大隈重信宛」明治二年七月二十九日

亂筆御推覽可被下候近日板垣後藤も歸國仕候由後藤等近況承知仕居候歟とも存候尙御序も御座候ハヽ御尋可被成候拜拜啓折角是より可相窺と奉存候處昨日態々御光來奉萬謝候客來彼是取紛失敬而已申上候御容赦可被下候必竟前途之事も緩急之順序ハ可有之候得共於政府ハ百年之大方略ハ必相定居不申ゐハ所詮　皇國維持之目的無覺束候處根軸不相立朝變暮移益人々之方向を亂り候樣之儀有之候ゐハ終ニ瓦解ニ至り候外無之小氣慨ニゐも有之候もの總ゐ今日之用を相あさむ諂者諛者之世界と相成不可復之形勢ニ至り可申歟付ゐハ病之熟もるをまち他日內地大戰爭之實力をたくゑへ候歟又も根軸一定之處を相計り候もの歟乍然此事今日ニ甚六ツケ敷樣奉存候其中先生之御高策をも奉窺度奉存候然處弟も病骨ニゐ頃日尤困却且又過日來紛紜之情實も有之切迫ニ歎願仕漸四五日前湯治御許容ニ相成最前之行がゝりも有之餘り遷延仕候ゐも不都合ニ御座候處雨天彼是無餘儀延引仕候節角昨日御示しの邊も有之四五日延引仕候へハよろしく御座候得共狐疑世界ニ付種々之議論出來候ゐもいま〳〵敷御坐候間甚奉恐入候得共先横濱まで出りけ御樣子御待可申上候此段不惡思食可被下候先ハ爲其草々頓首九拜

七月二十九日

尙々當節尤御多務之折柄ニ付必先生御出浮ハ御六ツケ敷歟と奉察候於弟ハ自然御同行相叶候得ハ無此上奉存候得共如何哉と御按じ申候尙横濱まで乍御手數御都合御示し可被下候以上

大隈老兄　御密拆　　銕面生

七六　木戸孝允書翰「大隈重信宛」明治二年八月朔日

先以御清適奉賀候過日御噂有之候ニ付十二字過まで御待申上候得共御樣

子不相分候ニ付散歩旁參上申候處御出違ニゟ乍殘念引取申候先頃入御覽候書類明日御内々ニゟ御返し可被下樣御願仕候且又今日之行形ニゟ大藏省之處も前途之懸念不少注意不仕ゟハ不相成事歟と奉存候漸一事如意相成候得ハ忽反意之事連續出來甚不面目候且又別ニ入御耳置尙御高按も相窺度儀有之候處不能是非期後日可申上候先ハ爲其草々頓首

八月一日　　鬼　怒

大　苦　滿　樣　　御内密

【參考】　木戸孝允書翰「伊藤博文宛」明治二年八月朔日

亂筆御推讀奉願候宿はイセ（伊勢）文可然歟とも奉存候其中思食も有之候はゝいか樣とも可仕候以上

過日は朶雲御投與拜見仕候折角大隈を可相尋と存居申候處却ゟ被相尋折柄客來有之十分不盡意殘念に存申候間翌日直樣相尋候處不在故不得止一書相殘し置申候ゟ彌今日出立明日御地へ罷出申候間何卒關門之都合等可然御手數奉願候密情段々御噺申置度候隨分込り候事多く早晩も々々不面白事而已にゟ御座候先は爲其草々頓首

八月朔日夜　　品川驛より　　鐵　面　生

芳　梅　兄　　御密拆

七七　寺島宗則書翰「大隈重信宛」明治二年八月二日

昨日バークスゟ致應接候處十壹番バンクより新貨幣之形今以御差越無之ト申出右も數月前大隈より雛形被示疾出來可相成筈之を寫し之を鐫スル何故數月を經可申哉日本人之懶怠可想也日々喫烟笑話政府至要之勤を不爲動モスレハ勘辨評議と唱へ常ニ速成を誤り大嘆息之至ナリト例之罵言餘事ニ移り困り入申候是ハ兎モ角モ頻りニ御催促速ニ右をバンクゟ御送被成候樣致し度候僕ハ外ニ一難論有之明日ゟ兩三日出港（横濱行）之積ニ御坐候尙

歸府得拜唔可申候已上

八月二日　寺嶋大輔（宗則、外務大輔）

大隈四位殿

侍右

七八　三條實美書翰「大隈重信宛」明治二年八月三日

渡邊清（三陸巡察使附屬）左衞門歸府奥羽事情ニ付會議候間明朝第七字參集可有之候事

八月三日　實美

大隈民部大輔殿

七九　三條實美等書翰「大隈重信宛」明治二年八月五日

堺縣（小河一敏）大津縣（材木綱德）知事免職之儀昨日も申出ニ相成候得共今日兩縣知事出頭ニ付篤与申聞處

御趣意ヲ奉し奉職可仕趣ニ付先其儘致置此上勤方不行屆候ハヽ其節免職被仰付候ハも可然評決候間此段申入事

一養老米被下之儀今更被廢候義も如何ニも不都合之事ニ付是ハ是迄之通被下但當時會計必迫ニ付何与歟工夫ヲ以て御所置ハ別段之事

但此儀政府ヨリ猶評議之上別段沙汰可然事

一徒罪之者所置方是亦入費不少義ニ付別段之方法相立入費無之樣仕法可相立事

此儀も面會之上評決可仕事

右之條々不取敢申入候也

八月五日　實美　實則

大隈大藏大輔殿

八〇　中井弘書翰「大隈重信宛」明治二年八月六日

尚々時分柄寒冷不順ゟ東京折角御自愛奉祈上候牛乳等御加養過御御禁や

廿四日着坂山口井上兩先生格別ゟ勉勤坂中人氣も折合實効可相擧勢ひよ
ゑて東京ゟ御沙汰如何を相待次第然る處坂府も先御沙汰相通候付是又一
層折合相付幸甚ゟ加賀（權作）よも下坂又々五代同行ニゐ上京小松も三日滯坂ニ
ゐ上京近日滯坂ゟ筈御座候勿論僕も早速上京ゟ筈御坐候處歸船於神戸荷
物二ツ紛失外ニ先生ゟゟ賜刀是又紛失是も不念ゟ起り候ゐ僕ゐ罪無致方
次第神戸ハ一泊探索いゐし候得共相分不申尤船中大名四頭乘入混雜不都
合極り候次第御推量可被下候僕ゟ着坂直ニ櫻井愼平と同行西ゟ宮一泊ニ
ゐ入坂いゐし候坂地の穩ナルゟ實よ俗地とも乍申起臥ゟ地ナリ山口來訪
互ニ浮沈變遷ゟ常無キヲ嘆息シテ別レキ
一井上も陸奥（宗光）ゐ白馬よ乘り勉强餘裕ニも書畫器物ヲ弄び稅所長藏と知己
ニナリ書畫好事中ニ入候段金力連中とハ又格別風味御笑味可被下候○
兩婦の進退ゟ如何御洩し可被下候伊少輔子も同斷
一僕ゟ小松と同船ニゐ歸國ゟ合十五夜の月ハ宇治ニ見るべし五代ゟ小姉
と豐婦とゟ携へて京行シタリ未歸らず
一先生の病氣ゟ如何來陽も何分都會ヲ見へ賜ふべし希望候垂憐々々
一民部省合併の姿本望ナリ事の運びそふゐ模樣ナリと乍蔭喜悅仕居り申
候陸奥ヲ免して稅所を轉セシムルの議アリ稅所も當今病人卽今王子（英國王子）來
着の風聞兩港其用意アリ
一乍自由御願申上候拙子目貫二ツヲ夏雄（加納）よ賴置候に外ニ神山逸郎と申者
ゐ西洋紀行の彫刻ヲ賴置タリ此事鮫島（尙信）が承知シマシタゆへどふぞ金で
も不足シマシタラ御助力是祈り候實ゟ先生の繁忙ヲ煩スゟ實よ不本意
ニ候得共何分柴田氏ニゐも御賴御託被下鮫島ゐ御掛合被下度奉願上候
一第一御病氣御加養專要ニ奉祈上候廣澤大久保參議宣命前原ゟ越ゐ行と

の風聞も實正と奉存候

一僕も喘息又起りしも過御の祟ナランは是ゟ僻邑ニゟ德行ヲ養フテ名望ヲ附與し然る後ゟと奉合掌仕候何とぞ再會ヲ御待被下度其節ハ改悔別人ニナリテ日夜勉强可仕奉存候必ス來夏比又ハ秋比ニも宜敷御賴申上候副島公ゟも別段書狀差上不申御序を以可然御傳可被下候木戸先生ゟ宇治の題額在り何處ゟ御下置被下候哉伊少輔（伊藤博文）子ゟ御尋御序ゟ節御申越可被下候

一御老母樣又ハ側妻君ゟよろしく尙婦ゟも同斷

一悴龍太郎母子共大元氣有時とゝさんと呼ブの勢アリ込入マス此とゝさんの不所業ニもアキレマスと御笑可被下候

用事迄如此御座候以上

八月六日

大隈先生

中井悔菴

坐右

二白急便ゟ一書御返報被下度必ス夫を賴ゟ歸國可仕候頓首

八一　四條隆平書翰「大隈重信等宛」明治二年八月十三日

頗穐冷相增候處

皇上益　御機嫌能被爲渡恐悅御同慶奉存候次ニ貴官愈御安福珍重奉賀候隨ゟ此地一同無異滯在罷有候間乍憚御放念可被下候扨先達ゟも中村采一ヲ以此地情體質伺ゟ件々等逐一御聞取段々御配慮ニ相成候由重疊忝奉存候扨若松表於民情も稍平穩ニ相成且縣官員等も追々相揃各勉勵ニ付次第ニ實効相立候義ニ御座候得共只々夏以來冷氣勝ニ有之候ニ付秋收如何与一同煩心仕候底意御洞察可被下將又若松縣官員中彼是不折合ゟ義も可有之樣相見ゟ一同心痛仕居候ニ付內々言上仕置度候得共書取ゟ候間今度桃井八郎差出申候間同人より委曲事情申上候間乍御面倒委細御聞取置有

之度此段伏ゐ企望仕候先も早々要用計如此候頓首敬白

八月十三日　　（岩倉國巡察使）隆　平

民（松平慶永）部卿殿

民部大輔殿　　閣下

八二　北代正臣書翰（大隈重信等宛）　明治二年八月十六日

隨意ゑ亂筆御密覽早々火中に投し奉願上候事

別紙新潟へも（函館）當港最寄申付便次第相廻置可申事

長崎兵庫大坂へハ相廻し不申事

別紙神奈川縣へハ同樣ニ仕立相廻し申候事

清水谷侍（公考）從殿東京出府被致候ニ付早急一書奉拜呈候然も兩先生彌御清福御奉職被遊候半と奉遙祝候正臣事漸去六日深夜當函館着翌七日も日曜日ニ付手出不相成八日早天裁判所ニ出頭ゑ處一體當所ゑ吏亂惰至極從來ゑ風ト相見不都合言語ニ絶し譯官ゑ者迚一封ゑ書ニ數時も相費候次第此日午後三字ニ至り獨魯二岡士參り候得共各頭不相揃ヲ以面會不仕九日朝十字應接ヲ約シ此朝ニ相成候處各岡頭ゑ中米岡士不參ゐ各岡怫然不告ゐ立去一圓ゑ放慢輕侮從來府吏ゑ相招處小生萬々不平も今更無用ニ屬し候故新ニ改ゐ十日十字ゑ面會ヲ申遣ス此日各頭相揃談判相終十一日十字ヲ限所持金高ゑ員數ヲ書出さしめ十二日十字ゐ午後四字ヲ限り運上所中ゑ出張所ゐ持出さしむ其前市中ゑ締密ニ兵隊數十人ニ下命格別可疑ゐし則取調眞贋見切ニ取懸候處別紙ゑ通ニ御座候些少ゑ事申上迄も無之位ニ御座候御放慮被下度然處當方も僻遠ゑ土地何分贋ゑ多分御座候ハ府下接近ゑ處ニゐ不通用ゑ金ハ皆々此方角ニ相集居候義ト相見申候向後ゑ處も只々日夜懸想ニ堪不申ハ庶議ゑ動搖而已ニ御座候何分ニも邊土ニ參り込是ヲ政府ニ日夜相回シ候樣ゑ土臺ニゐも事務もなせ不申と奉存候惟此大藏省ニ關シ候事而已ニゐも不動搖樣御注意奉仰候事開港各所今ハ夫々取調相

付候上ハ府藩縣一樣十月ヲ限り眞贋員數取調可指出云々之御布告又同時ニ嚴然內地以贋金通用御禁止之此義ハ如何動搖相變しハ不仕哉不相變時ハ此上早々府藩縣ニ嚴令ヲ下し各所金ヲ撿し候一局ヲ爲取設其所ニ取調之時金ニハ嚴密ナル印章相表し萬人一目瞭然某所々々ト相分り候樣相成シ而後御取締不相成ゐハ各港外人所持金而已取調贋物御引換相成候共內地奸商之術略隱密なれハ迚も外人手ニ在處之眞物も不日ニ又贋と相成候半此邊姦商之所爲兩先生篤と眞箇之御考被成下愚意御體察至急府藩縣に一局取設之御布告被遊候樣致度府藩縣も狡黠者アレハ無左ゐハ贋ヲ眞ト仕事顯然ニ御座候事

偖ゐ本省民部合併如何御座候哉迚も時論ニ御遲疑被遊可惜歲月ヲ御虛度被成候ゐも何時ヲ待得ゐ新貨を鑄造セン邦家ヲ一新セン外人之輕侮ヲ雪カン人生有限之齡ヲ以時ヲ得處ヲ得且其位ヲ得悠々掣肘され無爲ハ可慙之至と奉存候朝鮮可討ンハ何會計之有無ヲ謂ハン蝦夷開拓スヘクンハ何ソ空論間議ヲ用ヒン往時北條氏之豐公ニ於ル如く小田原城中之議迚今日婦女子迄も憐笑する處卽今將ニ豐公あらんとす東京城中論動議搖嗚呼可あらん乎魯國ゐも都府ゐして山丹近ク鐵道を造作近年其功落成せんと云而後ハ一網ニ打盡さるゝ蝦夷一島而已ニゐ彼之意ニ充る正臣實ニ惑也サレハ早々大藏民部可合も合し新貨之可作ハ作リ討へキも討チ可開も開斷ゐ可行をのハ不行之ゐも如何ニ王事ト藉口仕其最早正臣等何ニ勤勞可仕魯連踏海之志も今日も慕敷も無御座海南父母之鄉ハ山富峯饒白雲流水適意之區ニ候へハ其處ニ餘齡相送可申歟又ハ蝦夷島中霜雪之中ニ凍死相甘開拓之靈鬼と爲り魯人之氣鋒挫折仕覽哉然時ハ日本之人民ゐるニ不背歟とも相考居申候御憐笑被遣度今ハ外人所持金ハ夫々見切相濟候ニ付直樣被仰聞置候本省出張一局取設且他日之見込相付候時ハ正臣引取も可然縷々被仰含候事故御布告通十月ヲ限り此地ハ此地丈其取調仕可申筈之處今般召連候五人之者之外此地之者ニ一人も金見之者無御座候ニ付ゐも當府（函館府）

十月ヲ待調付書出し候義相成譯ニ無御座任外之事ニ候得共不得止五人之者をして續ゐ内地之調ニ爲取懸申議ヲ相決申候不入世話と可思召歟不奉存候得共此方之義ハ府ゟ下命税金（榎本釜二等之造金ヲ申）通用之義ヲ先般停止シ裁判所中へ其節六千餘金南貞介等申合市中所持之金ヲ取上ケ候ゟ人氣動搖ニ付中途ニして其義ヲ止メ今日迄六千餘金依然裁判所中ニ相預有之又被取上之者共へハ其高之多少ニ應し半金丈之御借付とり號して楮金相渡候由一體奇妙之政務相施し有之土地柄ナレハ他所ニ比較仕り同一視ニも被仕不申處柄ニ御座候是又御推察被遣度扨又被仰聞候當處楮金相調候處一切今春十萬兩カ其儘川上宗輔をして南貞介指圖仕り東京へ持參正金引換相計候處其義不相叶佐原何某（松本藩士佐原志賀之助）ト哉覽へ相預ケ空手ニして川上某歸來追々頃日之聞ゐ佐原何某大半於東京遣拂候趣當處之事ハ大略是ニ比し申候中々監督も其實ヲ表候ニも此樣之處ニゐも人を損不申ゐも不相成指當看過難成事ハ抗論之處今般清水谷殿堀眞五郎已下辨解夫是之爲出府仕候ニ付委細同人ゟ御聞取被下度所詮々々開拓判官先生達被參候共當地ニ限り些々事六ヶ敷候事と被存候當府今も何之金も無之先日松前ゟ七八千金借り受夫レも頃日も遣拂近日當府付屬とりニゐ肥後人上林ト申商法人ゟ五千金ト歟一萬金ト歟楮金之内證借り仕候由正臣等之所へハ不入候奇妙之事ニゐ今日之足り候處と存候其上當地之人民各藩海岸之烏合物姦惡之風一朝夕之事ニ無御座候趣ニゐ實ニ意外之手段仕り須臾も油斷ハ不相成心持ニ御座候召連越候五人之者等些少之旅費追々ニ土地人民ノ所持三十萬近キ金を五人ニゐ取調候義物價騰揚之區何日迄相懸申事哉今少之間ヲ過候時ハ雪氣と相成由所詮歸路相絶候ゐハ正臣已下五人之者暫時之心得ニゐ出張之事是社憫然之事トハ垂憐可被下左レハ臨時相應極外ニ南貞介樣之處置も不仕候得共用意金ヲ以窮難相救可申遣又貪婪無比之正臣も兩先生御書中之四等官ト哉覽ヲ確守仕り金ニ相窮候時分ハ斷然用意之中ゟ先七月十五日後ゟ算定相受可仕也此邊奇怪之御譴責御座候ハヽ此手紙御落握之

上至急交代之者御指越可被下何かも祈寒霜雪之中ニ凍死仕候も意外ニ奉存候開眼天濶雲飛山横水青此外國中遮隔之物も無御座邊區ナレハ勿論酒可飲醉ゐも可歌何相憚ン不然ゐも片時も鬱屈ニ堪不申御海容可被下今般當地ニ出張仕候ゐも大藏省而已ニ申置御座候段是又左樣御聞置被下度外國官か出張之者南貞介相初都築（莊馘）何某ニ至迄滿耳之醜聲聞ニ不堪義小吏輩婦人女子迄も口吻ニ相懸ケ候ニゐ外國官ト哉覽申候ゐも被打殺計之事ニ御座候正臣も惜らぬ命ニ候得共函館人ニ被殺候も好ミ不申大呵々々世味酸辛那必關鷗飛遠渚夕陽殷秋風無限天涯邊孤劍又登函館山　醉携唱妓醒凭欄歸計未成秋已闌欲說羈愁人不見暮山雪謝雁聲寒御笑可被下惟々時下秋氣御專愛被遣度爲邦家大願是事ニ御座候誠恐々々死罪頓首

八月十六夜三更か四更後ニ至り燈將滅時閣筆

正　臣

拜具

大隈老先生

伊藤老先生　執事

八三　伊藤博文書翰「大隈重信宛」明治二年八月二十日

内地贋金處置振御布告書御廟議御一定相成候へハ速ニ御布行有之度奉存候於京攝急場差迫候節ハ臨機之處分相着不申ゐも不相成候處一時之處置相施置候ゐハ一般之御處置ニ齟齬仕不都合と奉存候ニ付預メ承知仕置度奉存候廿二日迄ニ御一左右御申越可被下候

○坂田源（伯孝）之介へ横濱在勤至急ニ御申達可有之候

○遠國旅費支度料其外御規則書四五部幷ニ此節御發行之官員（官員簿）至急横濱迄御送可被下候

○上野敬（景範）介ハワイ行使節之命ハ政府か至急特權御委任之御沙汰有之度奉存候不日飛脚船便有之趣ニ御座候

○ヤンシ一條今夕刻可申進候

御繁務中千萬乍御手數前條早々御運ひ夫々御沙汰可被下候拜具

八月廿日

八四　木戸孝允書翰「大隈重信宛」明治二年八月二十五日

亂筆高恕

拜啓秋冷之節ニ御座候處先以御清榮ニ引續キ御盡誠大賀此事ニ奉存候さて先頃御供可申上都合ニゐ横濱まで御先ニ出浮折柄い藤俊介ニも面會仕候處此節之御都合ニゐ御手拔之邊萬々御六ツケ敷事ニゐ御先へ罷越御待申候方上策との說ニ御座候間渉御違約奉恐入候得共一日半ほど滯港仕候ゐ直樣山中へ趣(急)申候其後度々俊介よりも書狀差越申候處北地一條其外御多務ニゐ不相變旦暮御盡力之邊遙ニ承知仕候爲邦家雀躍之至ニ奉存候乍去不容易御苦慮之邊實ニ奉恐察候于時此度對州藩舊知之仁ニゐ大島友之丞と申候もの來訪彼藩ハ段々由緒も有之壬戌癸亥頃より少々藩政をも相談ニ預り候邊有之一藩之困却不容易其由ゐ來る處元より一朝一夕之事ニゐ無之舊來朝鮮通交を以相立居候處幕府之衰候ニ隨ゐ自然朝鮮なども驕傲之氣味有之加るゑ又對州ゑおゐても失所致爾後通交貿易等も尤衰微一日も一日より相迫り無餘儀於舊幕も前途之目的も無之救助仕來候樣之次第御座候處今般御一新ニ至り候ゐハ救助筋之邊道絶へ且昨年御一新ニ付朝鮮へ御達ニ相成候已來何歟狐疑を生じ貿易之次第も斷絶ニ至り候由依ゐ彼藩ニおゐても今日宗家之事ニゐも無之知藩事之職被仰付候上ハ一藩之目的相立且又人民を安し候手段相着き候得ハ知事ニおゐて奉對　朝廷御奉公筋も相立候處此儘ニゐ從來之次第をも言上不仕一日ハ一日より困却終ニ他日　朝廷之御厄害相りさみ候を被存默々罷在候ゐハ片時も難安次第ニゐ此度知藩事ハ別人ニ被仰付宗從(重正)四位ハ　御側近く被召遣候とも華族丈ケ之御奉公ハ仕候儀ニ付此成行を以表裏之御奉公いりゑも安心難

仕心事承知仕且俊介も知人之事ニ付相談仕候處老臺へ御談仕候樣ニと相傳へ置尙此度右之都合を以預相談候處弟ニおゐても更ニ手段無之乍去心事ハ尤之儀ニ御座候間老臺へ得と御示談仕候ゐ受御指揮候樣相談置申候間能出候ハヽ御面會被成下可然御差圖可被下候曾ゐ粗御内話も仕候通宇内之條理を推し是非朝鮮ハ相開き度必竟ハ大ニ我方向を不言之中ニ相立隨ゐ萬緒機宜を料理仕候ゟも都ゐ此間ニ可有之歟と愚考仕候一念難忘奉存候何卒時至り候ハヽ御敎諭被成下候ゐ偏ニ御助力奉願上候尙餘ハ拜靑と申縮候其中時下御自玉爲邦家專一之御事ニ奉存候草々頓首九拜

五月念五

尙々東京ハ如何之氣候ニ御座候哉山中（箱根）ハ霧煙ゐらされハ只雨當月日光を見候事不過兩三度候敬白

大隈老臺　　孝允拜

御密拆

【備考】木戸孝允養痾の爲め八月朔日東京を發し箱根に赴く、十六日蘆の湯より韮山に至り、同廿七日復た宮の下に歸る。本書はこの際のものに係る、有名なる一穗寒燈照眼明の詩は九月十二日箱根山中の作なり

八五　三條實美書翰「大隈重信宛」明治二年八月二十六日

今日以
勅詔御救恤之御沙汰被仰出候ニ付下官所存別紙書取を以申陳候猶御所存承度尤同省中奏任以上同意否明朝迄承度候事
一今日開拓使申出ニ相成舟外國船借入二艘一ハ唐太ゟ運漕一ハ兵部省ヨリ申立尤至急之儀ニ付別段其省ゟ打合候上ニて可差許事柄ニ候得共直樣許容申置候猶島（義勇、開拓判官）舟（衞、兵部權大丞）越ヨリ可及示談候間宜處分有之樣賴入候也

八月廿六日

右府

大隈大輔殿

急用

【備考】是年兵戈の餘加ふるに淫雨を以てし民庶生を安んぜず、八月二十五日乃ち救恤の詔を發せらる

八六　廣澤眞臣書翰「大隈重信宛」明治二年八月二十七日

兩京究民御救助ニ付ゐゑ昨日　詔書被　仰出候間速ニ其府ニ於テ施行急務ニ有之就ゐゑ過日德大寺殿ゟ御渡相成候賞秩官祿等引當來月ゟ月別東京府へ米三千石京都府へ同七百石宛大藏省より御渡方段取書之儀明日中御取調へ被仰出候樣ニ与右府(三條)公被命如此御座候以上

八月廿七日　　廣澤　拜

大隈　樣

御直

【備考】八月二十八日東京府に米三千石、京都府に米七百石を爾後毎月賑給する旨を達せらる

八七　刑部省通牒「民部省宛」明治二年八月二十七日

贋金一件ニ付御問合之趣致承知候右も當省ニ於ゐも早速所置相附太政官ゟ斷刑伺差出し置其後度々催促ニ及候處政府ニ於て是儀ニ付段々御議論有之候趣ニゐ今ニ何の御沙汰も無之候右及御答候也

八月廿七日　　刑部省

民部省御中

八八　伊藤博文書翰「大隈重信宛」明治二年九月三日

分袂後引續御勉勵爲邦家御盡力日夜御苦心之程遙察仕候僕も去月廿五日兵庫着港公私俗務相片付昨二日上坂山口(尙芳)其外へも面晤逐々事情承候處別段相變候事柄も無之物價も都合矯合七月來格別之高下も無御坐到此節候

ゟハ少し下落之勢ニも至り可申乎之模様ニ相見へ申候阪府造幣局其外ヘハ未た見廻り不申候乍然局ハ餘程之成就仕候趣ニ御坐候井上（馨）近日出足長崎可罷越都合ニ御坐候加賀（維作）ハ外御用も有之旁兩三日中下坂之筈ニ申遣有之候ニ付萬事申合人員省略等追々手ヲ下シ可申心得ニ御坐候出足前略御取極相成居候内地贋金御處置之儀貳拾五兩ニゟ引換云々之儀ハ井上、山口も同意ニ付至急一般之御布令相成度左スレハ御布令ニ基き早々取集可申手段ハ如何樣ても可有之奉存候

諸藩ゟ上納之正金當地丈ケニゟ九拾萬兩餘相納申候市中ゟ調達之金札ハ四十五萬金之高ニ付追々正金下渡殆皆濟ニ至り申候京師も員數難相知候得共追々相納候趣ニ御坐候右ニ付兼ゟ御示談申置候通當地幷兵庫、長崎三港外國人所持之贋金丈ケ當月十日前後ニ引替可申積ニ御坐候尤長崎之儀ハ便船有之次第正金差送可申候間横濱、新潟、函館三港ハ東京ニ於て引換之御都合御取計可被下候尤新潟、函館ハ同時ニ參り兼可申候得共其段前以公使ヘ御申通置御取計相成候ヘハ障碍有之間布正金御繰替之儀暫時御取計相成居候ヘハ跡より京坂之内ゟ繰替如何樣共可相成奉存候

陸奥陽（宗光）之助出府之命有之候處別紙之通願出候ニ付乍御面倒辨事ニ御達可被下候同人儀ハ病氣旁ニゟ是非御辭退申上度趣意と相見申候至急之御用向旁他人御撰擧同人ハ御免被　仰付候方可然奉存候御内意迄ニ申上候

税所長（篤）藏儀も兩三日前兵庫ヘ出港仕候御用向揔ゟ陸奥ゟ引渡申候中島作太郎（信行）ハ兵庫參事ニ被　仰付候樣御沙汰有之度候税所も同意ニ付定ゟ同人ゟも申出ゟく候へども速ニ御沙汰相成候方可然奉存候

當年秋熟之儀ハ中國筋其外大凡七分方之出來と申事ニゟ格別大凶と申程ニハ無之樣子ニ御坐候前條要件之廉々有之候ニ付至急申上候速ニ得貴意申度爲其如此御坐候匆々頓首再拜

九月三日午後　　伊藤大藏少輔

大隈民部大輔殿

【備考】是年十月二十四日府藩縣に令し、惡金銀臺の分は百兩を金札三十兩に交換すべきを以て、速に其員額を錄上せしむ

八九　伊藤博文書翰「大隈重信宛」明治二年九月七日

過日以飛書粗當地之事情申上置候ニ付御承知被下候御事と遙察仕候其後更ニ相變候儀も無御坐候處過ル四日黃昏於京都暴客七八名大村益次郎（兵部大輔）旅寓ニ亂入席上在ル客兩人被殺害大村ハ幸ニシテ死を被免少々手疵を負此節養生中ニ罷在未タ其暴舉ニ及ひ候者共探索も行屆不申趣甚不都合之次第ニ御坐候定而從京師委敷報知有之御承知相成居候事と拜察仕候

一先般御改革相成候職制及ひ官祿表等速ニ府縣ニ御布行相成不申而於府縣も一定之規律難相立區々ニ相成居候而ハ官員月給等も右御制度ニ隨而難相改至急夫々御達相成度奉存候尙過日御決定相成候河內堺合縣之儀現場施政之上ニ於ても甚不便利之趣ニ而彼是故障も有之候ニ付堺ハ大坂府管轄ニ被　仰付河內縣被立置候ヘハ民政向甚都合克可有之兵庫豐崎合縣ニ相成候處是も住吉郡東成河邊三郡ハ何也も大坂近方ニ而大坂府管轄ニ被　仰付可然奉存候堺縣之儀ハ舊幕中も奉行支配ニ而市政而已ニ御坐候故大坂府管轄相當之儀と奉存候高野領此度堺ゟ支配可致候御沙汰ニ相成候處同所ハ奈良縣之支配ニ被　仰付候方相當と奉存候既ニ五條ヲ奈良縣管轄ニ被　仰付候ニ付高野ハ同所近方ニ付至極便利と奉存候右ハ實地ニ於テ爲上下便宜ニ有之大坂府並山口、井上、稅所等熟議之上申越ニ付速ニ御決定有之度奉存候

大坂新港治河之儀ハ實地見分仕候處速ニ御止メニ相成候方可然と奉存候ニ付不殘爲引拂申候尤是迄出來之場處漸十分ノ二位ヨて此後成功迄ハ百六十萬餘之金を費し兩三年を經不申而も成就不仕候ニ付斷然廢却と取極申候

過日も申上置候通贋金御處置幷中下大夫減祿之儀早々ニ決定有之度奉存

候

昨年中京攝ニ於て是迄取立來候諸税免除被　仰付有之候處右ハ甚不都合
之事ニゟ取締等も出來兼候事ニ付舊幕中同樣取立候樣御沙汰有之度奉存
候

前文至急御運ひ被下候ゟ速ニ御答奉待候爲其匆々申進候頓首再拜

伊藤大藏少輔
山口大藏大丞

九月七日

大隈民部大輔殿

九〇　三條實美書翰「大隈重信宛」明治二年九月七日

宇都宮藩ヨリ拜借願金之儀其省ゟ掛合ニ相成候處如何哉實ニ會計必迫之
折柄ニ付定ゟ難及取計事情とハ相察候得共既ニ昨年ヨリ御許容之上彼藩
義ハ王事ニ盡力致候ヨリ城市兵燹ニ罹り實ニ必至困迫之情實無據義ニ承
候間何与ゟ出格之詮義ヲ以て願通ニハ無之共聊ニても御差許相成候ハヽ
直樣金子御渡し無之共宜候由唯々御許容ニ相成候へも取續方之策略も相
付候由眞ニ飢渴ニも差迫一藩之情無相違趣ニ候間別段之詮議可有之候小
子も由緒柄之義ニ付私情ニ渉り候樣ニ相成如何候得共段々困迫之情實難
默止以書中申陳候條篤勘辨有之度候要用而已如此候不罄

九月七日

大隈大輔殿

實美

内用

九一　野村盛秀書翰「大隈重信等宛」明治二年九月七日

拜呈絶ゟ不奉伺御動靜候處益御安泰御盡力之由爲國家大慶存候當地も此
節變革相始たり畢竟も井上西四辻公(公業)を奉し下崎變革スルとの説内外ゟ布
滿し井上造幣判事ニゟ當地を一掃スルと理ゟし ゟと張紙等アリて人心恟

々飛脚船入津毎ゟ井上の動く茂待おいつれも危懼御用も運さるゟ到達り
仍あ中山先生も同論急發し三日ニ一同廢官同日岡田平井郡田横山尾上野
口白木青木を舉あたり（局庶務庶務）（大屬外庶務外權大屬刑局刑）
庶務局も會計町郡普請社寺を合併セリ兵隊百人を精選セリ委細辨事官ハ
御屆仕候間猶當不當御叱令御下聲を乞ふ然るゟ當縣ニあも岡田御用懸に
助勤平井外國局司長と大體六等官之當りを以御□（不明）申付置候處此節縣名ニ
あ大屬ニ相成候へも彼是官職表ニあも七八等ニも可相當や當縣も申迄も
無く公事訴訟あつ外國交際も重大之事件も有之事ニ候間兩人丈も特命を
以六等邊之所ニ御登用相成候御工夫も有之ましくや敢あ不體裁之吹擧い
ゑし度存意にハあらさるゝ人物至當と思ふを以てゝ當時人材登庸何ゝ府
藩縣甲乙大小を選むん況や交際地内外之御用多忙ゑるをや崎地遊惰中ニ
ハ岡田の如きは方正之士共可申此一人もいもゆる國家之事を患るものと
相許居候事ゑり

右ニーヨルク就出帆急々如此御座候敬白

九月七日　　野村宗七（長崎縣知事）

大隈先生
佐々木（高行）先生

九二　北代正臣書翰

「大隈重信等宛」　明治二年九月十三日

伊太利軍艦コロタイルト横濱ゟ向出帆仕候便百拜一書遠呈打絶兩老臺御
容子拜承不仕候得共益御盛祥御奉職被遊候御儀ト萬々奉謹祝候隨あ正臣
事依舊島上（北海道）淹留一息存在之仕合御休念被遣度先般横濱縣ニ於あ御別仕候
際縷々尊諭之次第今日迄佩服仕居候得共夫是御變議ト指見ゟ又自横濱ハ
爲何爲知も不仕中外國人よりハ種々訴出可聞事一も無御座終ニハ正臣一
己之虚喝ト迄相疑候位ニ御座候元ゟ其件々申上候迄も無御座正臣ニ於あ
ハ頑固ニも守株不相搖候得共不都合至極當方辭遠迎餘り御見放被遣候あ

も不相成候檢金事務相終候後も毎時北地に多分金子積廻し有之候外國人召遣之者之中ニハ或も其品無之か其儘金子持歸候者不少氣之毒ニも候得共最初約定通一應眞贋之改而已ハ爲仕指遣し候得共各自之損失御申聞其者等不平困難各岡等も正臣儀持餘し居候容子定あ横濱居留之公使等非道之計ト歟何角可申立候得共事情爲御聞不被下故畢竟左之通守株仕候儀御聞置被下度各開港所外人所持惡金員數ト申候迚十萬乃至廿萬位ニ可有御座何故早々御引換不被遊哉一旦裁然御決定相成置又々飜然御變被遊候樣内外前後ニ左程御遲疑相成候あも何一ッ邦家之事務ハ相運申間敷來十月中内地之贋ト哉覽府藩縣一統其高取調云々御布告も嚴然通用指留不申時ハ取調ハ實地相成不申定あ各所人民一時方向相失騷動可仕候得共夫位之事ヲ御掛念被遊候あも御布告通取調も出來申間敷浪華井上君之方も定あ依然之御事ニ可有御座將又楮札御製造御再議被遊府縣藩一統に御施相成害無御座ニ相似申候詰る處幾年ヲ經候あも政府之損分ト歟ハ不免譯只々一新とも王政ト歟喋々仕候中貨幣贋惡之海内ニ滿布仕り政府上ニ在あ恥共不仕も和漢古今珍敷鐵面皮ニも無御座哉ト角申候内魯人唐太に三四所之礮臺相築申位ニ候切角今日迄國事ニ御苦心被遊候も御疑遲相成候時も水沫ト可相成正臣心事御憐察被遣度漸頃日開拓司典ト哉覽之人到着不日島君（義勇）等三百餘之大兵入島之聞に御座候ニ付着島之上ハ早々一先正臣も歸府頃日之御定論拜聽被仕可申相樂罷在候清水谷（公考）已下先般出府萬事御聞取被遊候哉掛想之至ニ御座候當歳奥羽凶稔蝦夷地米穀相廻り兼平常向寒之時分ニも奥羽小民男女出持ト歟申立日夜當地等へ渡海入込候得共米價ハ四斗入壹俵五圓二分乃至六圓も仕候由當地守衛相詰居候松前弘前等之兵隊も悉皆近日相解歸藩爲仕申候位開拓先生達或も東京並ニ相心得數百人も暴ニ入込直ニ北地に赴候哉當地ニ相止候哉不存候得共視民如傷先生ニ無之あも窮民之餓尸不日道路ニ累々可仕開拓官員迚近日當（到）着仕候一人ハ當方商家數千軒ニあ前ニ非道ニ金貨横取之何某ニあ大司典ト哉覽ニあ今

般參り込右豪商家之訴訟書昨今二三通も指出候此樣之人物一々御採擢ニ
あ數百人も此島ゟ參り候ハヽ如何成開拓出來候半歟無信あも不立とも頑
人ハ申候正臣等更ニ廟議人材御取舍了解難仕長大息處ニも無御座候實ニ
眼界咫尺之中も目擊ニ不勝此上歸府仕候樣兩老臺御書面無御座中ハ泰然
復命も不仕心事覺悟仕居申候縱令窶身仕候共一人も土地之窮民其處ヲ不
得道路ニ餓死も爲仕不申此邊分外之事又聊未自量共可申候得共無餘儀處
ニ出張仕候故又無餘儀見捨候ニ不忍候深御垂憐可被仰付島君早々來着相
成候時ハト渴望至極ニ候往々窮蹙之事情局務倥偬中縷々奉申上候正臣最
初當着職務相初候ゟ今日之今ニ至候迄一日半日之休暇も難仕日出ゟ日沒
ニ至寓所ゟ引取申候事ニ御座候得共根本ニ於あ老臺方御變議歟ト回顧仕
候あハ諺ニ申犬骨折ニあ事水沫ニ相屬ス而已臨紙不能盡所懷誠惶誠恐頓
首拜呈

菊花月十又三日朝十時

北代正臣

大隈老先生

伊藤老先生

各位侍者

敬白

二陳猶々不淺時下秋氣御愛護御奉職被遊被下度爲邦家千祈萬禱是事
ニ御座候再拜

九三　吉井友實書翰「大隈重信宛」明治二年九月十七日

暫者不得拜顏候處御所勞之由如何被爲在候哉折角御加養奉祈候扨薩藩贋
金之高幸輔（吉井）ゟ國元會計方之者ゟ内分尋越候處今般内田仲之助便あ返
答申遣候概算百五拾萬と申來候間極内分先生迄御胸算之爲御通し申上置
候宜ク御含居可被下候猶追々外藩をも探索相分候ハヽ可申上候何之拜顏
旁可申承候也

九月十七日　　吉井彈正少弼

大隈民部大輔殿

御親披

九四　廣澤眞臣書翰「大隈重信宛」明治二年九月十八日

爾後御所勞如何被爲在候哉爲國家御自重奉萬禱候陳者贋金引替御布告振御評決只樣御延引ニ相成り實は集議院ゟ御下問ニも相成り候事ニゟ素ゟ格別妙論も有之間布候得共全體天下人心ゟ關係之事ハ可成丈け公議被爲盡候上於政府御決議相成筋ニ候得は假令集議ニ悖り候共人心居合可然儀も不少事ニ付其御都合彼是大キニ遲延ニ立到り則ち公議御採用ニゟ別紙之通御布告相成候ゟ可然哉との御内評ニ有之其實先三拾兩ヲ以テ引替へ被下候上銘々取持高もし免惣高得と御取調らへ之上大藏省御繰合相調候得は尙三拾兩之上ゟ少々宛ニゟも年賦ヲ以テ夫々持主ゟ御下渡有之度との旨趣ニゟ其年賦下渡之引當金ハ大藏省ニ於テハ下地三拾兩之所ニゟも御難澁之事故尙其餘は出方有之間敷譯柄ニ付惡金鑄造之藩々ゟ相當御咎方之上年賦ニゟも償金上納被　仰付可然哉との御見込ニゟ當時御評議中ニ有之畢竟其償金洩見留ニ引替方ゟも卽今三拾兩之當リヲ以テ下渡追ゟ精調之上尙御吟味振も可有之との餘地ゟる洩御示被成置追ゟ尙百兩ニ付拾兩下渡都合四拾兩ニ相成候御都合ニ有之償金論御決議之上は三拾ヶ年賦ニゟ決末迄ニは則卽今三拾兩宛引替金幷外國引替又は正金ニ鑄替等之公損も立償置可申積ニ有之自然償金被　仰付候御決議之上は別紙於政府取調之趣ヲ以テ御布告相成り候ゟ不苦哉其中拙生より及御相談候樣ニとの事に付得貴慮候極密御回答奉待候尤差急匆卒文意不及御了解候ハヽ無御用捨御不審被仰聞可被下奉賴候謹言頓首

九月十八日

明十九日正午迄御回答ニて賴候事